九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—XXIII—

福岡県鞍手郡鞍手町所在遺跡群の調査

1 9 7 8

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—XXⅢ—

福岡県鞍手郡鞍手町所在遺跡群の調査

1 9 7 8

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は，昨年度をもって終了し，本年度はこれまで未発表であった遺跡の報告書を漸次刊行に努力しているところであります。

この報告書は鞍手郡鞍手町地区を，昭和50年から51年にかけて発掘調査を行ないました。歴史時代関係の発掘調査の記録であります。

鞍手地方の歴史を知るうえで，貴重な資料を，わたくしたちに提示してくれたと考えられます。

本書を，学問研究に，教育の場に，活用いただければ幸甚です。

発刊にあたり，本文中に記名した方々をはじめ種々の協力をいただいた関係各位に深い感謝を捧げます。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1．この報告書は，九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち，1975・1976年に調査を行なった鞍手郡鞍手町所在の埋蔵文化財の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団の委託事業として，福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ …… 副島　邦弘
Ⅱ …… 副島　邦弘
Ⅲ …… 副島　邦弘
Ⅳ — (1) …… 副島　邦弘
— (2) …… 倉住　靖彦
— (3) …… 近沢　康治
— (4) …… 副島　邦弘・近沢　康治

4．掲載写真のうち遺構写真は副島邦弘が，遺物写真は石丸洋氏の指導の下に岡紀久夫・松山芳文氏が撮影した。

5．実測図の作成は，遺構については調査員及び調査補助員があたり，遺物の実測は副島邦弘・平ノ内幸治・平田春美があたった。製図については，二神和子の協力があった。

6．本書の編集は，副島邦弘が担当した。

本　文　目　次

頁

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 3

Ⅲ．発掘調査の記録 …… 5

1．段の上遺跡の発掘調査 …… 5

2．音丸城遺跡の発掘調査 …… 9

3．後牟田遺跡の発掘調査 ……27

Ⅳ．考　　察 ……29

1．発掘調査の結果 ……29

2．音丸城跡の歴史的背景 ……30

3．鞍手町関係年表 ……40

4．福岡県中世山城地名表 ……43

図　版　目　次

段の上遺跡

本文対称頁

PL. 1. (1) 段の上遺跡近景 …… 5
(2) 発掘区全景 …… 7
PL. 2. (1) 土墨断面 …… 7
(2) 1トレンチ西端の状態 …… 7
PL. 3. 出土遺物（土師器・須恵器） …… 8
PL. 4. 出土遺物（陶磁器） …… 8

音丸城遺跡

PL. 5. 発掘前の遺跡群（航空写真） …… 9
PL. 6. 音丸城遺跡俯瞰航空写真（東から） …… 9
PL. 7. (1) 伐採後全景（東から） …… 10
(2) 伐採後全景（西から） …… 10
PL. 8. (1) トレンチ全景（南から） …… 13
(2) トレンチ全景（西から） …… 13
PL. 9. (1) 土墨全景（東から） …… 13
(2) 土墨近景（北から） …… 13
PL. 10. (1) 土墨と空濠との関係 …… 14
(2) 土墨断面写真 …… 14
PL. 11. 空濠の出土状態（南から） …… 15
PL. 12. (1) 空濠全景（東から） …… 15
(2) 空濠全景（西から） …… 15
PL. 13. (1) 空濠断面写真（西側） …… 16
(2) 空濠断面写真（東側） …… 16
PL. 14. (1) 五輪塔出土状態（南から） …… 16
(2) 五輪塔出土状態（北から） …… 16
PL. 15. (1) 上部構造をはずした状態と六道銭出土状態 …… 18
(2) 腰石の状態と六道銭出土状態 …… 18
PL. 16. (1) 五輪塔出土状態（北から） …… 18
(2) 五輪塔復原状態 …… 18
PL. 17. 出土六道銭（宋銅銭） …… 19
PL. 18. 五輪塔周辺の土師器出土状態 …… 20
PL. 19. 出土遺物（土師器） …… 21
PL. 20. 出土遺物表土層 …… 15
PL. 21. 音丸城跡の土墨状態 …… 25

後牟田遺跡

PL. 22. 後牟田遺跡トレンチ全景 …… 27

挿　図　目　次

Fig. 1.　昭和50・51年度調査遺跡分布図（縮尺約1/650,000）…… 2
Fig. 2.　鞍手町内の中世山城と今回の発掘地点（縮尺1：50,000）……折り込み

段の上遺跡

Fig. 3.　段の上遺跡地形実測図（縮尺1：1.000）…… 6
Fig. 4.　遺跡全測図（縮尺1：200）……折り込み
Fig. 5.　トレンチ配置図（縮尺1：400）…… 7
Fig. 6.　土層断面図（縮尺1：80）…… 7

音丸城遺跡

Fig. 7.　音丸城遺跡地形実測図（縮尺1：500）……付図
Fig. 8.　地形測量図とトレンチ配置図（縮尺1：1000）……12
Fig. 9.　8Aトレンチ土層断面図（縮尺1：40）……折り込み
Fig.10.　8Bトレレチ土層断面図（縮尺1：40）……折り込み
Fig.11.　土塁断面図（縮尺1：40）……14
Fig.12.　出土遺物実測図（陶器）（縮尺1：3）……15
Fig.13.　出土遺物実測図（弾玉・土錘）（縮尺2：3）……15
Fig.14.　空濠土層図（縮尺1：40）……16
Fig.15.　空濠実測図（縮尺1：40）……折り込み
Fig.16.　空濠断面図（縮尺1：40）……17
Fig.17.　五輪塔出土状態実測図（縮尺1：20）……折り込み
Fig.18.　五輪塔実測図（縮尺1：4）……18
Fig.19.　出土遺物拓影図（六道銭）（縮尺2：3）……19
Fig.20.　五輪塔周辺部土師器出土状態実測図（縮尺1：20）……20
Fig.21.　出土遺物実測図（土師器）（縮尺1：3）……21
Fig.22.　現況地形図（縮尺1：800）……24
Fig.23.　復原地形図（縮尺1：800）……24
Fig.24.　字　図（縮尺1：1000）……付図
Fig.25.　音丸城の防禦網（縮尺1：1.000）……折り込み
Fig.26.　音丸城の縦断面図（縮尺1：400）……折り込み
Fig.27.　天満神社神殿……25

後 牟 田 遺 跡

Fig.28. 後牟田遺跡地形図（縮尺1：1000）……28

考　　察

Fig.29. 「続風土記附録御調子書上帳」音丸城記載の部分 ……30

表　目　次

Tab 1. 発掘地点一覧表 …… 2
Tab 2. 土師器計測表 ……22

I. はじめに

鞍手地区の発掘調査報告書は『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―XII―』向山遺跡，『―XIII―』高木遺跡に，昭和50年から昭和51年にかけての調査について，その調査経過とそれにいたるまでのことについて述べている。

本報告書は鞍手町関係の第3冊目として刊行するものである。

この報告書には，大字室木字段の上の遺物散布地，大字新北字音丸の中世山城跡，大字中山字後牟田の遺物散布地の3遺跡について報告する。

調査主体は福岡県教育委員会として，同文化課技師が携わることとなった。

なお，日本道路公団の調査関係者は『―XIII―』を参照されたい。

総　括

教育長 浦山太郎　　教育長 森田　實（前任）
管理部長 西村太郎　　文化課長 藤井　功
文化課長補佐 武久耕作　　文化課調査係長兼参事補佐 松岡　史
文化課技術主査 栗原和彦　　文化課技術主査 宮小路賀宏

庶務会計

文化課庶務係長 大渕幸夫　　文化課主事 山本文和
文化課主事 大神　新　　文化課嘱託 因　将太

発掘調査員　（段の上遺跡・音丸城遺跡・後牟田遺跡関係）

九州歴史資料館 倉住靖彦　　文化課技術主査 栗原和彦
文化課技師 石山　勲　　文化課技師 副島邦弘

発掘調査補助員

佐土原逸男　　平ノ内幸治　　日高正幸
宇野慎敏　　近沢康治

遺物整理（総括）

文化課嘱託 岩瀬正信

鞍手町教育委員会

教育長 安増忠明　　社会教育課長 遠藤茂雄
社会教育課長 香月次郎（前任）

報告分の遺跡は次表のとおりである。

Tab. 1．　発掘地点一覧表

段ノ上遺跡	鞍手郡鞍手町大字室木字段ノ上	自昭和50年11月４日一至昭和50年11年15日 自昭和51年６月１日一至昭和51年６月29日
音丸城遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字音丸	自昭和50年８月25日一至昭和50年９月５日 自昭和51年３月１日一至昭和51年５月31日
後牟田遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山字後牟田	自昭和50年10月20日一至昭和50年10月27日 自昭和51年７月５日一至昭和51年７月15日

鞍手町・鞍手町教育委員会と発掘作業員として参加されました町民各位の絶大なる協力があった。

（副島邦弘）

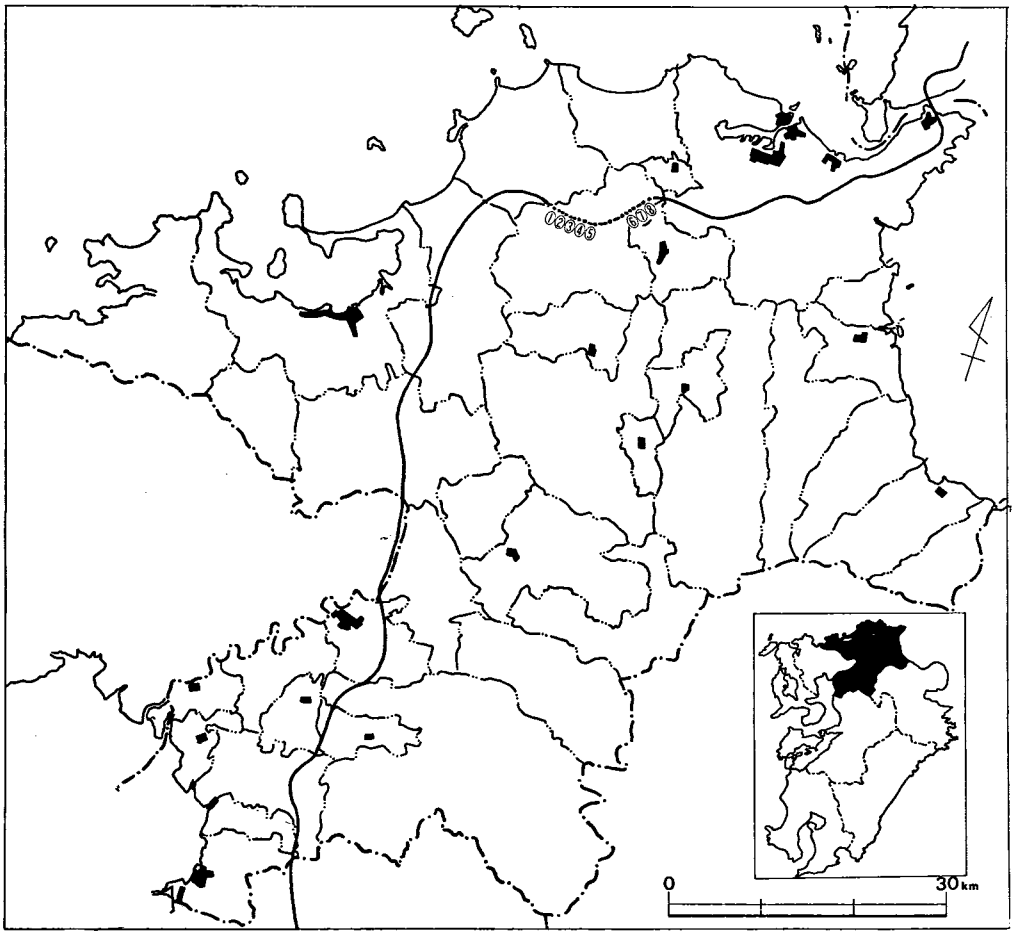


Fig 1.　昭和50年～51年度調査遺跡分布図（1/650,000）

① 遠園遺跡　　⑤ 都地遺跡

② 茶臼山城遺跡　　⑥ 段ノ上遺跡

③ 小原遺跡　　⑦ 音丸城遺跡

④ 汐井掛遺跡　　⑧ 後牟田遺跡

Ⅱ. 位置と環境

鞍手町の地形は，中央をいわゆる金国山系が南北に貫通している。南に中生層の鞍手花崗閃緑岩地帯である六ケ岳が聳え，傾斜は南西に急で北東に緩やかである。

六ケ岳の山塊は，長谷および，北は直方市神崎の段丘を形成し，再び剣岳として崛起している。

剣岳山系はさらに北に伸びて立林，山ケ崎の段丘を作っている。山ケ崎で一時地中に没するが，再び神崎，道中，松隈，掛津，虫生津と断続しながら遠賀郡へぬけている。

この剣岳山系は低段丘からなっている。剣岳段丘の東は六田川の流域の田圃を隔てて十念山段丘があり，その中間に中山平野がある。

十念山段丘の東は遠賀川平野の一部で，かなりの田圃が開け，その一部は遠賀川に沿っている。

剣岳の西は長谷・新北の谷を隔てて低い高木段丘があり，その西に南北に長い西川平野がある。西川平野は北に下る程勾配がゆるく，一部では低く落ちこんでいる。だから排水が悪く湿地が多い。

次に西を限る山系は西山山系といい，孔大寺山系に属し，宮田，若宮を経て嘉穂郡へぬけている。

これが鞍手町の地形である。この地形に立脚して，それぞれの時代の生活が営まれている。

『—XⅢ—』で報告した高木遺跡では，弥生・古墳時代の遺構のあり方について述べたが，今回の報文は歴史時代それも中世以後であるため，その特色を見い出すことはむずかしい。

調査報告される3ケ所の遺跡は六ケ岳山麓の段丘状に位置するものである。

この時代の営みを反映するものとして，古城跡の位置と，歴史的な背景を若干述べてみたい。

平安時代末期は室木・古門は宗像社領，八尋は粥田荘，他は植木荘に属していた。

これらの荘園はその一つの行政単位として，戦国時代にはいっても，大いに乱れていだが，行政単位として残っていた。

戦国時代室木は宗像郡の中にある。古門・神崎は宗像神社の社領として，木月・上木月は遠賀郡の中であり，八尋は大内氏の守護代である杉氏領，新北は安国寺領であった。

守護大名であった少弐氏と大内氏の争が博多を中心にして争奪線が行なわれたが，この鞍手町は大内氏に支配されていた。

その後，少弐氏が滅んだあと，大内・大友氏の草刈場的な位置として筑前国があったわけで，天文年間末に大内氏が亡び，筑前の様相が一変した。大内氏に代って毛利元就が九州を侵攻すると，これを迎え討つ大友氏との間にしばらく兵乱の日が続く。

その後，九州の三雄といわれる薩摩の島津義久，豊後の大友義鎮（宗麟），肥前の龍造寺隆信は，ともに九州の咽喉といわれた筑前を手にいれようとして，約20年間の争乱の日が続く。

天正十五年（1578年）豊臣秀吉が島津氏を討つことによって，やがて終結へと幕が降りていくのである。

鞍手町周辺の山城は，戦国時代，宗像氏と大内氏との関係によって，戦と和がいりみだれるのである。

大内氏が滅び毛利氏にかわっても反毛利＋宗像氏との関係によってかわり，毛利氏が引いたあとも，大友氏と反大友＋宗像氏との関係によって，それぞれその時の立場において変化するのである。

支配者と被支配者との関係は，支配者の考え方一つで，喜びがあり，それがすぐさま悲しみへと変化するのである。

発掘地点は３ケ所であるが，これらのことを踏まえながら，中世から近世にかけての手がかりとしてほしい。

鞍手郡内の中世山城は次の通りである。

内　山　城　（鞍手郡宮田町内山）

山頂部にあって規模は不明で，築城者は吉野神九郎で天文11年の戦い時の城代ともいわれる。

古　野　城　（鞍手郡鞍手町）

別称春日城　西方の山に位置するもので，宗像氏の出城。

剣　岳　城　（鞍手郡鞍手町中山）

山頂部にある山城で，梅野土佐守が応仁年中に築城し，その後宗像氏や跡部安芸等によって拡充された，石垣，空濠・郭も残っている，詳細な調査が必要である。

腰　山　城　（鞍手郡鞍手町新延乙ケ谷）

別称，新町城・城ノ腰城ともよばれ，野中勘解由の築城によるもので，山城でその規模については不明である。野中氏は大友家の家臣である。

猫　　城　（中間市上底井野字道上）

別称月瀬城ともよばれ，平山城の形式をとり，永富四郎左衛門によって築城されたもので，土塁・郭・空濠等が残っている。麻生氏の出城で，天正年間は宗像氏の城代として吉田倫行が守っていた。

音　丸　城　（鞍手郡鞍手町新北）

山城形式で，土塁が残っているが，「書上帳」に記される空濠は現況では把握できない。九州縦貫道が一部を通るため正式な調査を行なった。その結果は次章で述べる。

（副島邦弘）

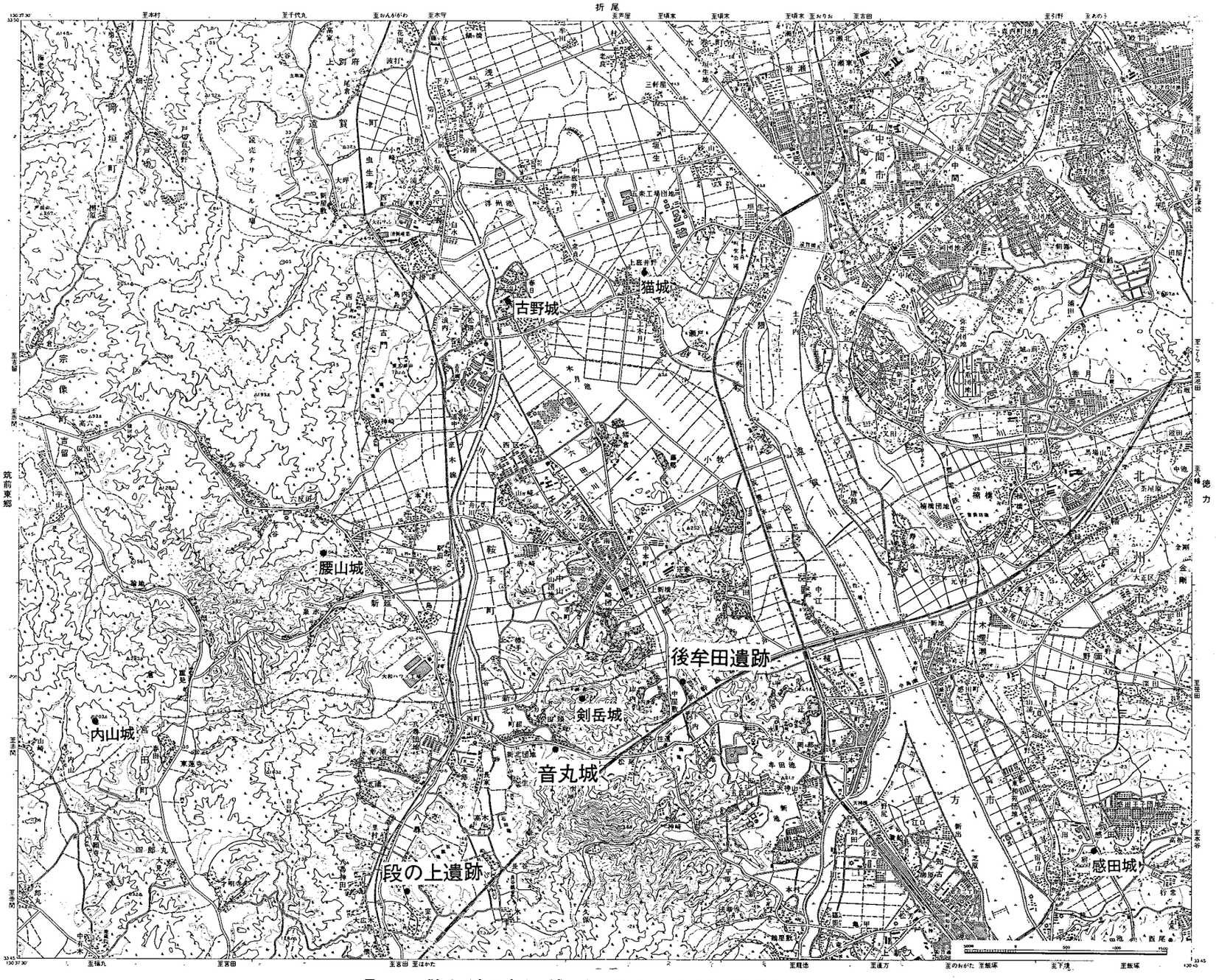


Fig. 2．鞍手町内の中世山城と今回の発掘地点（1／50,000）

Ⅲ. 発掘調査の記録

1. 段の上遺跡の発掘調査

2. 音丸城遺跡の発掘調査

3. 後牟田遺跡の発掘調査

段の上遺跡の発掘調査

（鞍手郡鞍手町大字室木字段の上所在）

本 文 目 次

頁
1. はじめに……5
2. 遺構と遺物……7
3. 小結……8

段の上遺跡の発掘調査

1. はじめに

段の上遺跡は鞍手郡鞍手町大字室木字段の上にある。位置は西川と長谷からの段丘が舌状に張り出した台地上にある。室木小学校の裏に位置するもので歴史時代の土墨と遺物散布地としてリストアップされていた。

本格的な発掘調査は昭和51年6月1日から同年6月29日までの約1ケ月をあてた。

この調査関係者は

調査担当者	福岡県教育委員会文化課	技師	副島邦弘
調査補助員			平ノ内幸治
			日高正幸
庶務担当	福岡県教育委員会文化課	主事	山本文和
		嘱託	因　将太

以下調査日誌によって，調査行程をふりかえってみよう。

6月1日〜6月3日　機材搬入後，下草を伐採する。道路の中心杭を基点とし西へ5mの南北軸を基線として，3m×30mの発掘区を1Tとして設定し，発掘にはいる。

6月5日　1Tには遺構らしきものは検出できず，南端で谷がはいっている。

6月7日　飛入で，旭古墳の緊急調査が出てきたので，作業員を動員して1週間でやりあげる（　〜**11日**）

6月12日　現場復旧作業。1Tに直交するように2Tを設定する。

6月14日　2T遺構なし。

6月15日　1Tに直交するように3Tを設定する。遺構検出できず。

6月18日　4T〜5Tを設定後，表土を剝ぐ，若干の遺物出土するが遺構らしきものなし。

6月23日　6T設定後土墨と思われる断面を切る。土墨とは考えられない。

6月24日　7〜8Tを設定し，それぞれのトレンチで断面を切るが，疑問点多し。

6月26日　設定したトレンチを完掘。

6月28日　仕上げの写真撮影と実測。

6月29日　補足作業後，発掘完了する。

6月30日　機材搬出。

Fig. 3. 段の上遺跡地形図 (1/1.000)

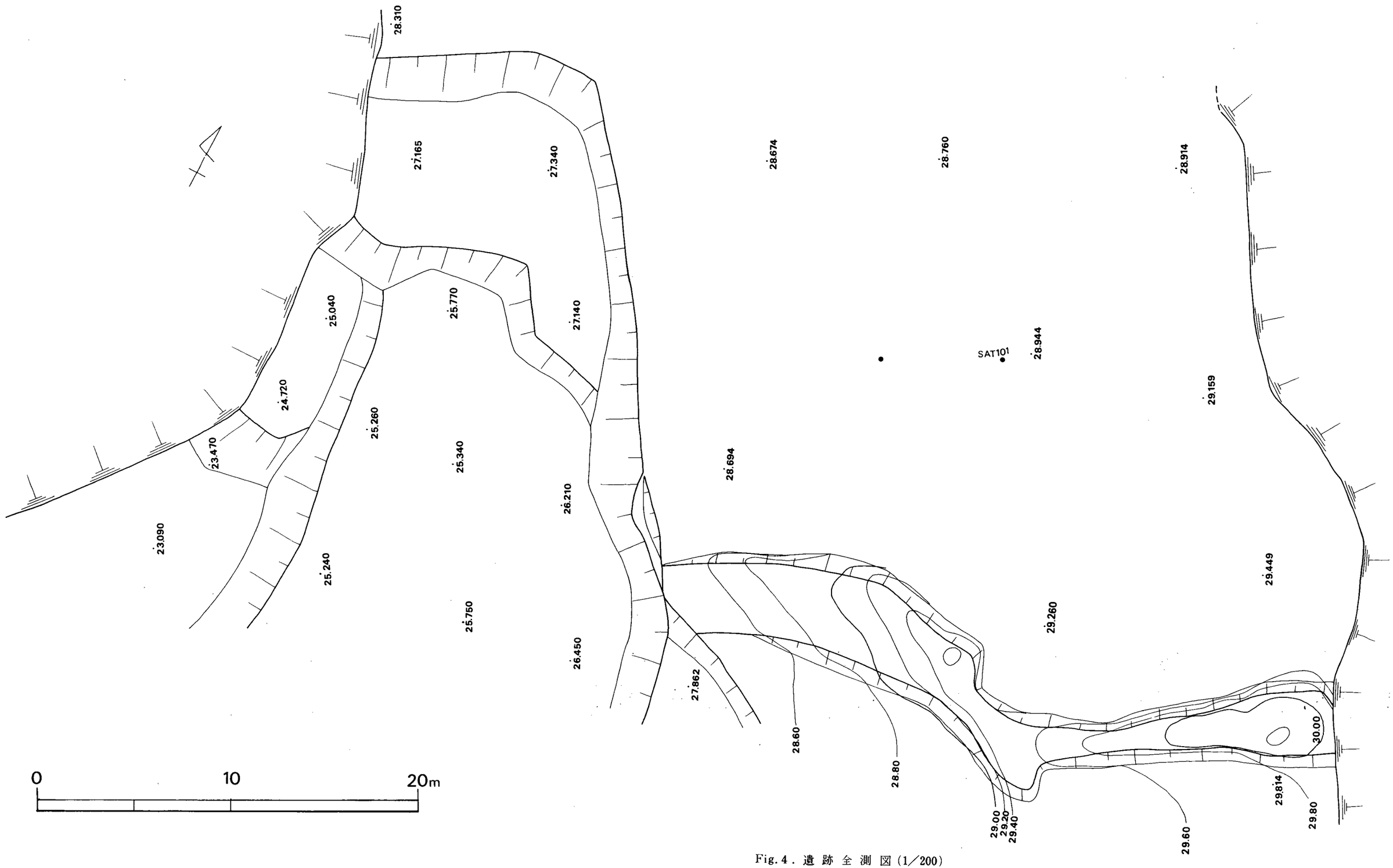


Fig. 4. 遺 跡 全 測 図 (1/200)

2.　遺構と遺物（Fig.3～6,PL.1～4）

遺　構（Fig.3～6）

8本のトレンチを入れたが，明確な遺構は検出できなかった。

当初，歴史時代中世期の土墨と考えられたものについては，Fig.6の示めすように，一段もり上った部分について，断面を切ってみたが表土直下に基盤があって，その基盤を削平したものをもり上げて帯状を呈し，表面観察で土墨を呈していたと考えられる。

これは全体が一時籾作され，よって削平されたと推測されるもので，籾作時に妨げになった石・礫を集めたものが帯状を呈したと考えた方が当を得ている。

以上のことから土墨とは考えがたいという結論となった。

遺　物（PL.3・4）

出土した遺物は，すべて表土層からのものばかりである。その量は，ポリ袋で3袋であった。

青磁・白磁・土師器瓦器・近世陶器類であった。

土師器・須恵器瓦器（PL.—3）。①と②は

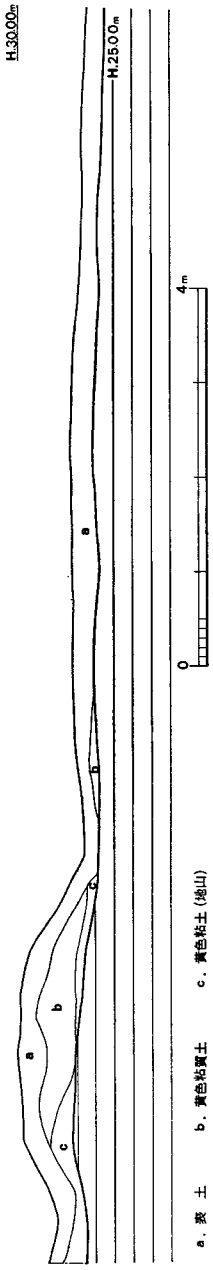


Fig. 6.　土層断面図（1/80）

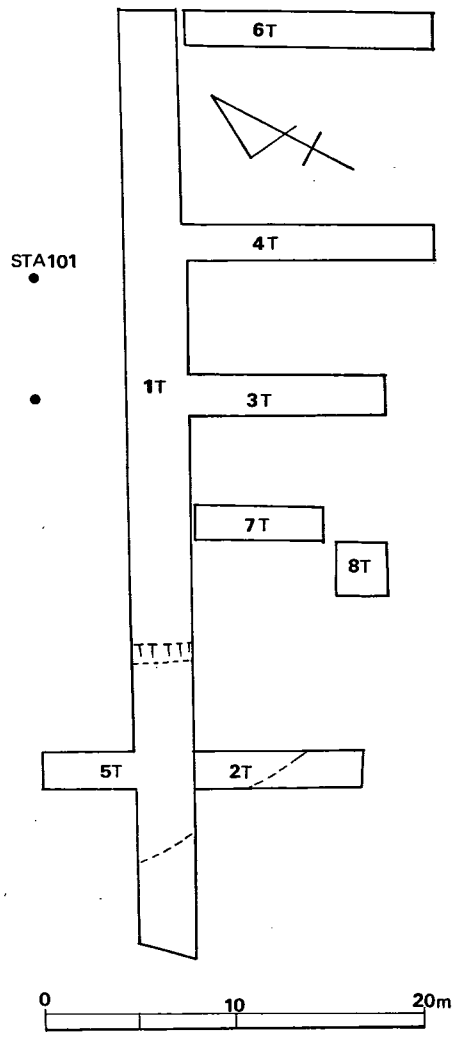


Fig. 5.　トレンチ配置図（1/400）

瓦器である。③は内黒土師器。④須恵器の皿形土器，⑤高台付の瓦器である。④を除いて，焼成は良好ではない。①と②は同一個体である。色調灰青色で，軟質な焼きである。調整はヘラにて調整されている。

PL—4は近世陶器と磁器物を中心に組んでみた。

青　磁（PL-4-①②⑩）・**白磁**（PL-4-③）・**近世陶器**(PL-4-④⑤⑥⑦⑧⑨⑪)である。

青　磁　（①，②，⑩）⑩は竜泉窯で焼かれたもので，見込文様は花文様で施釉は全体に施こされている釉は草青色である。焼成は良好である。①は8角を呈する皿形である。釉は草青色で，施釉技術はそれほどでもなく，器形としておもしろいものである。時期的には⑩近いものと推測される。

②，は①よりも新しくみられるもので，貫入がはいっている。

白　磁　（PL—4—③）福建窯の白磁で，口縁に耳をもっている。

近世陶器　（PL—4—④⑤⑥⑦⑧⑨⑪）

黒釉のもの⑤・⑥・⑧・⑨で，天目まがいのもので，黒釉がかっているから天目と称してもよいと思われるが，唐津・高取で焼れたものに黒釉のかかったものがあるからその一群である。④・⑦は有田焼である。⑪は仏具である。

3. 小　　結

遺構と遺物の結果から，時期を決定する遺構はとらえることができなかった。表面観察から土塁のあとと推定された帯状のものは，断面観察から削平された土がもり上げられたものであると理解された。

そこでこの帯状のものは何であるかと考えるに，地境として理解した方が妥当である。

そこで**Fig.** 3の地形図と字図を結合すると，ほぼ帯状のものの上にのることが判明した。

このことをもってその結論としたい。

本調査の結果を箇条書にすると，

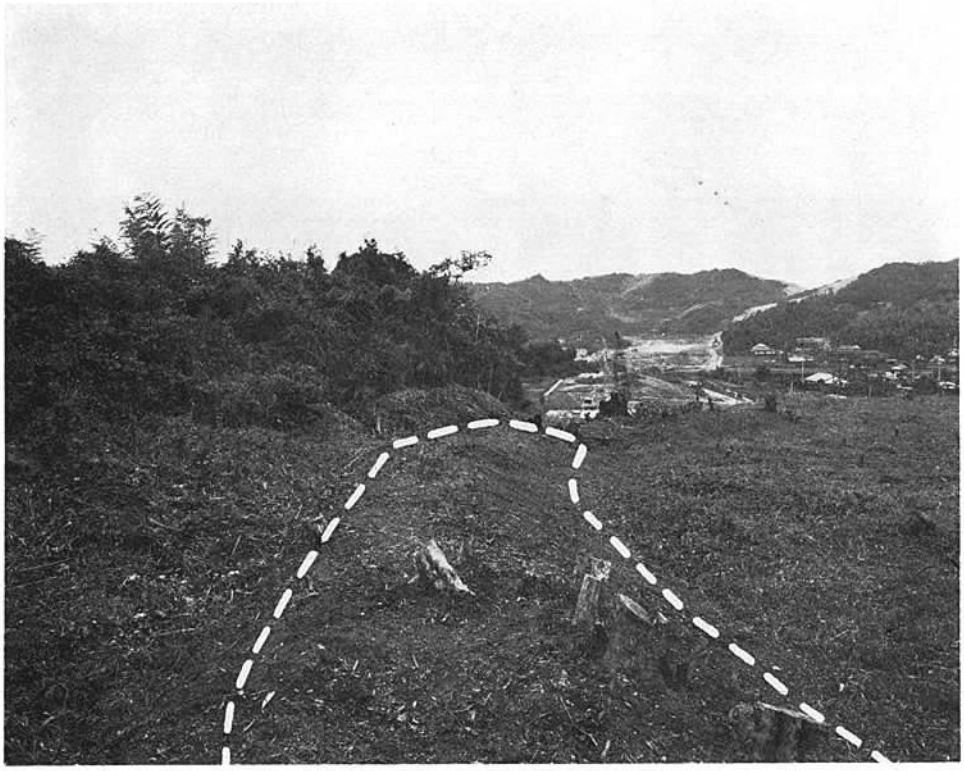
1. 帯状の土塁線の一部は，発掘調査の結果，削平された地山がもり上がったものと理解できた。
2. 青・白磁等の出土をみたことによって，近世にいたって削平され，遺構として残っていなかったと推定される。
3. 帯状の土塁線は，字境（地境）である。

以上の3点をもって調査の結果としたい。

（副島邦弘）

段の上遺跡

図　版

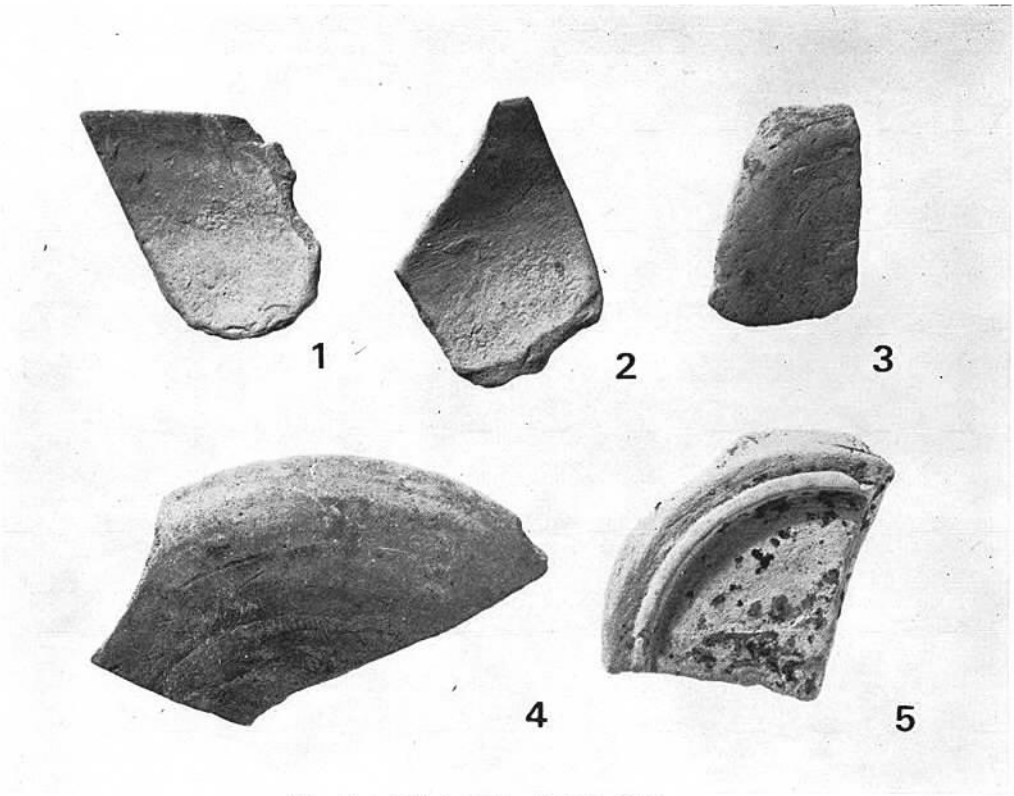


(1) 段の上遺跡近景（点線内土塁線）

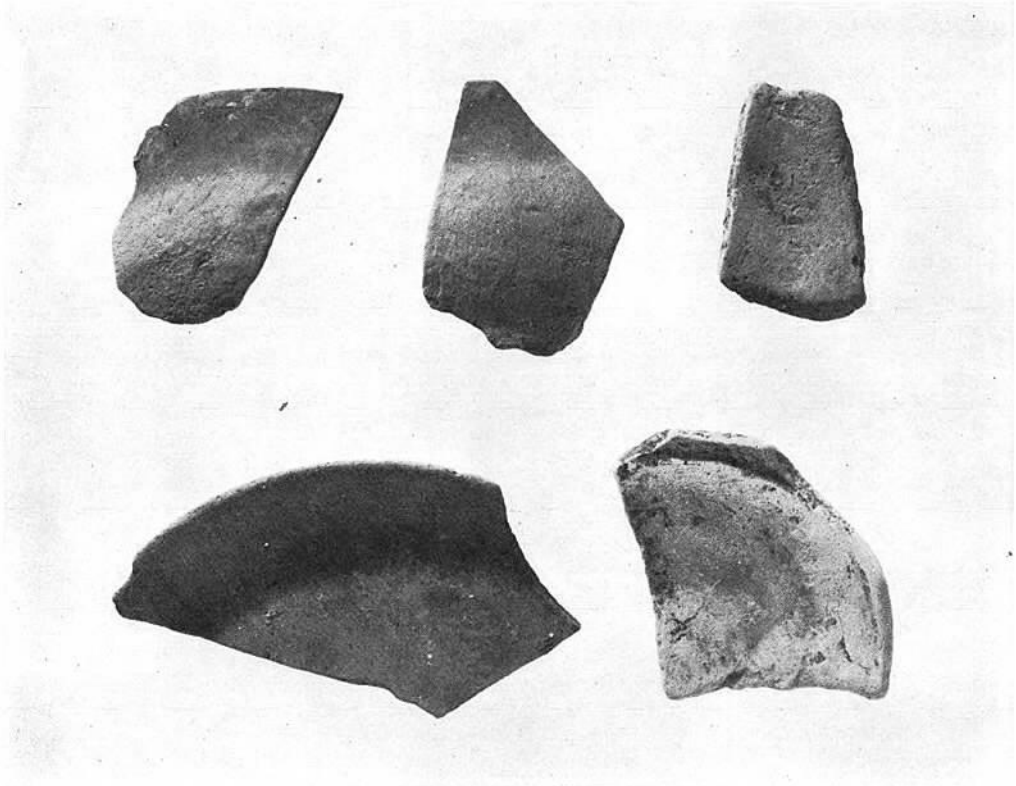
(2) 発 掘 区 全 景

(1) 土 塁 断 面

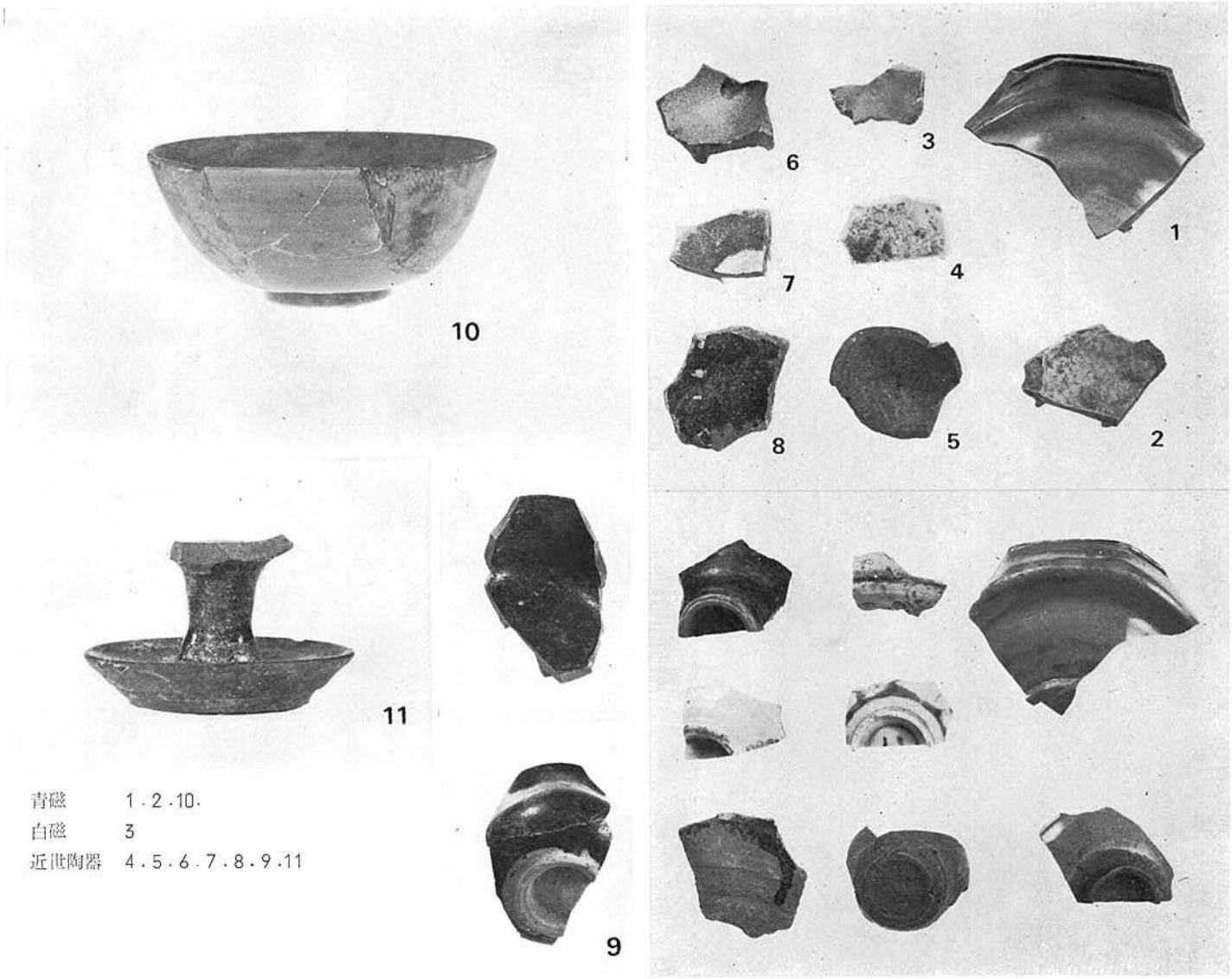
(2) 1 トレンチ西端の状態



(1) 出土遺物土師器・須恵器（表）



(2) 出土遺物土師器・須恵器（裏）



青磁　1・2・10・
白磁　3
近世陶器　4・5・6・7・8・9・11

出　土　遺　物（陶磁器）

音丸城跡の発掘調査

（鞍手郡鞍手町大字新北字音丸所在）

本 文 目 次

頁
1. はじめに……9
2. 発掘区の設定と層位……13
3. 遺構と遺物……13
4. 小結……25

音丸城跡の発掘調査

1. はじめに

音丸城跡は鞍手郡鞍手町大字新北字音丸に存在する。天満神社の裏を縦貫道が通る，天満神社のことについて，金川文書の中に『筑前続風土記拾遺』の書上帳に一文が記されて，戦国時代に音丸に城があるということが書かれている。これを基本にして，分布調査の折り，土塁が天満神社を囲むように存在しているのを確認するとともに，文書を裏付る意味で調査を行なうこととなった。

調査は測量調査を第一次調査として行なうとともに，第二次調査を発掘調査とすることとなった。

第一次調査は，昭和50年８月26日から約10日間をかけて，1/500の地形測量を天満神社中心に作製するため，測量関係を東洋航空事業k.kに委嘱した。

航空測量と細部について，平板測量を併用することとした。縦貫道路線外については，区長の仲介を得て，地主の承諾を得て，下草伐採後に測量を開始する。10月下旬に測量図面ができ上がり，本格的な発掘調査を計画した。

第２次調査を昭和51年３月１日から５月下旬までに終了することとした。路線内はものすごいやぶである。

調査に関して，地主桜井敬氏・区長篠原重雄氏には測量調査の折りには，多大な援助をうけた。
文書関係調査について金川明敏氏の協力を得た。

調査関係者はつぎの通りである。

調査担当	福岡県教育委員会文化課	技師	石山　勲
	福岡県教育委員会文化課	技師	副島邦弘
	九州歴史資料館	技師	倉住靖彦
調査補助員			日高正幸
			平ノ内幸治
			宇野慎敏
			近沢康治
庶務担当	福岡県教育委員会文化課	主事	山本文和
		嘱託	因　将太

以下，調査日誌をもって，ふりかえってみよう。

3月1日　若宮から機材を搬入する。

3月2日　伐採開始ものすごい繁茂である。

3月3日 雪の為作業中止。

3月4日〜**3月8日** 伐採及び焼却。伐採終了後撮影台を設置する。

3月9日 午前中発掘前の写真撮影，尾根線上に2m×25mを1Tとして設定し，表土剝ぎ。

3月10日 谷に縦断する様に2T（2m×25m）を設定する。

3月11日 1T及び2Tからは遺構検出できず，ただ2Tからは近世陶器が若干出土した。3Tを設定する。

3月12日 雨の為作業中止

3月13日〜**3月16日** 土塁を中心に，1/200で測量する。4Tを設定する。

3月19日〜**3月30日** 5T〜7Tを設定する。表土を剝ぐ。

3月31日 土塁について，徹底した調査を行なう。

4月1日〜**4月4日** 作業を休んで，図面の整理と年度の計画をねる。

4月5日 作業再開する。6Tを拡張する。

4月6日 雨の為作業中止，図面整理。

4月7日 7Tを拡張する。

4月8日〜**4月10日** 空濠の遺構検出と発掘を行なう。8Tを設定する。

4月12日 8Tを発掘開始。表土剝ぐ。南側の山際に平坦面をもち，北向って45°の傾斜で落ちる。

4月13日 空濠について，写真撮影。8Tに集石遺構出土する。

4月14日 雨の為作業中止。

4月15日 集石遺構と思われていたが，ほぼ全貌があらわれ五輪塔と判明する。

4月16日 8Tの南からの傾斜からみて，北にもこれ以上の傾斜があると思われるので傾斜の変化点を出す。

4月17日 8Tの土層図取り。

4月19日 写真撮影。

4月20日 尾根線上に9Tを設定する。

4月22日 8T南端の断面の実測。五輪塔の周辺部から土師器の一括土器群が出土する。清掃後出土状態の写真撮影。

4月23日 雨の為作業中止。

4月24日 9T発掘する。遺構検出できず。

4月26日 写真撮影。（遺跡全景）

4月27日 実測の用意とトレンチ区を平板実測。

4月28日 五輪塔清掃後写真撮影。

4月29日 雨の為作業中止。

4月30日 〃

5月1日 復旧作業，水かき出し。

5月6日 写真撮影，微細図，各トレンチ。

5月7日 土層図作製各トレンチ。土師器群実測。

5月8日 空濠の全景写真撮影。

5月9日 文書資料調査の為，倉住技師来たる。文書調査開始する。

5月11日 五輪塔の割付と実測開始する。

5月12日 補足作業空濠にはいる。

5月13日 土塁を取りはずす。

5月14日 八尋の古墳の件で，会議する。作業は補足作業のみ。

5月15日 写真撮影，微細写真，土塁と排除後の写真。

5月17日 五輪塔の内部調査開始。

5月18日 東側から空濠写真撮影。

5月19日 雨の為作業中止。

5月20日 空濠の実測開始。

5月22日 五輪塔の内部より副葬貨幣出土する。（元祐通宝・元豊通宝）

5月25日 現場作業復旧。

5月26日 雨の為作業中止。

5月27日 五輪塔基壇まではずす。副葬貨幣2枚出土，全部で合計4枚。出土状態を写真撮影。

5月28日 五輪塔の実測終了。

5月29日 機材の整理。

5月31日 発掘終了する。機材を次の段の上遺跡へ。

以上が日誌である。空濠の検出と五輪塔の出土に要約される。

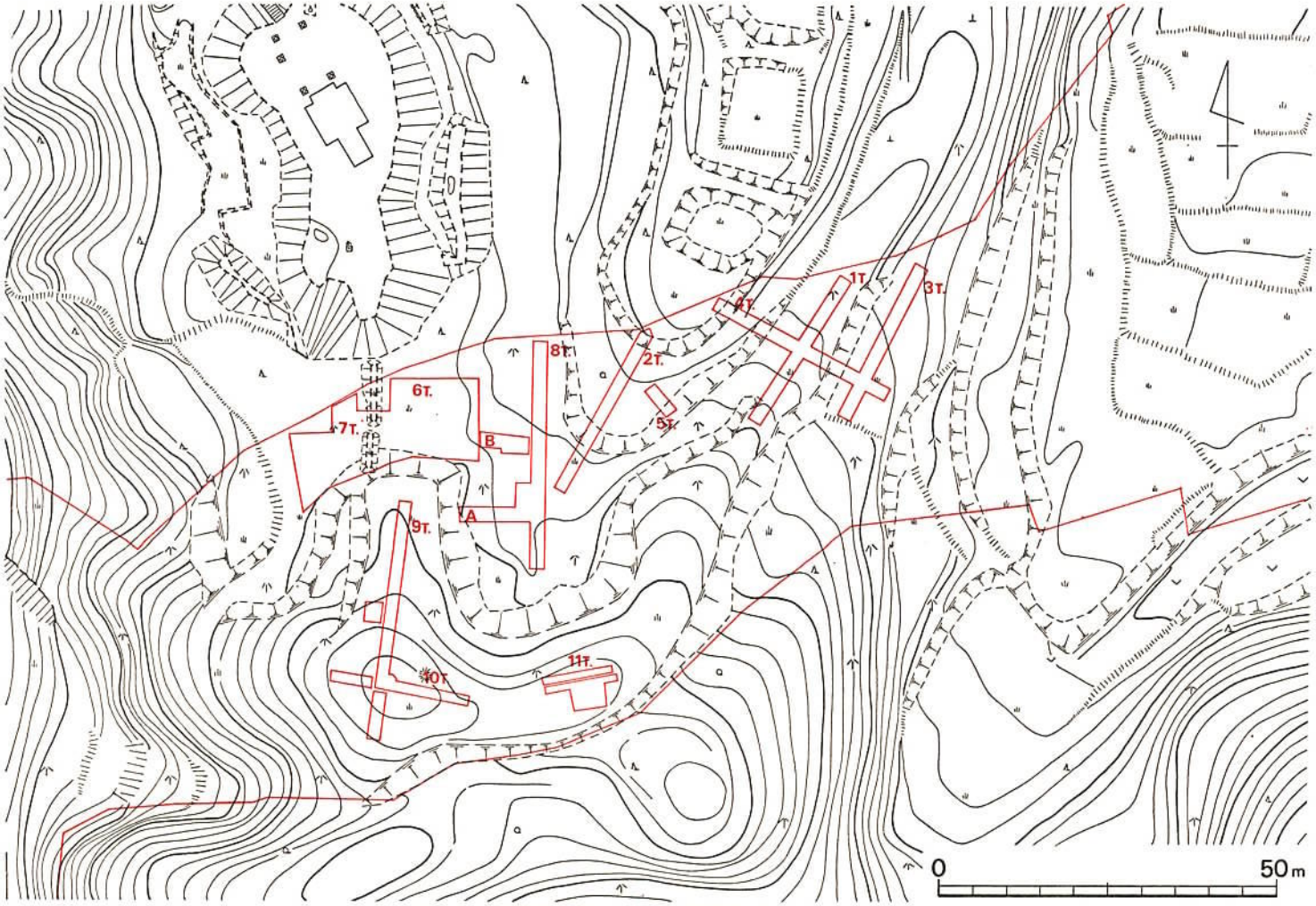


Fig. 8. 地形測量図とトレンチ配置図（1/1000）

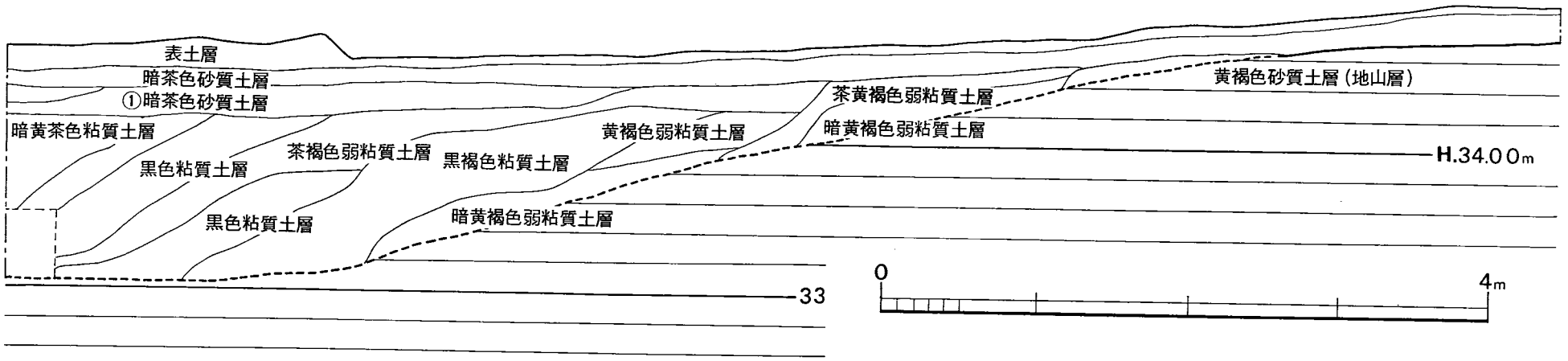


Fig 9.　音丸城跡８Ａトレンチ土層断面図（1/40）

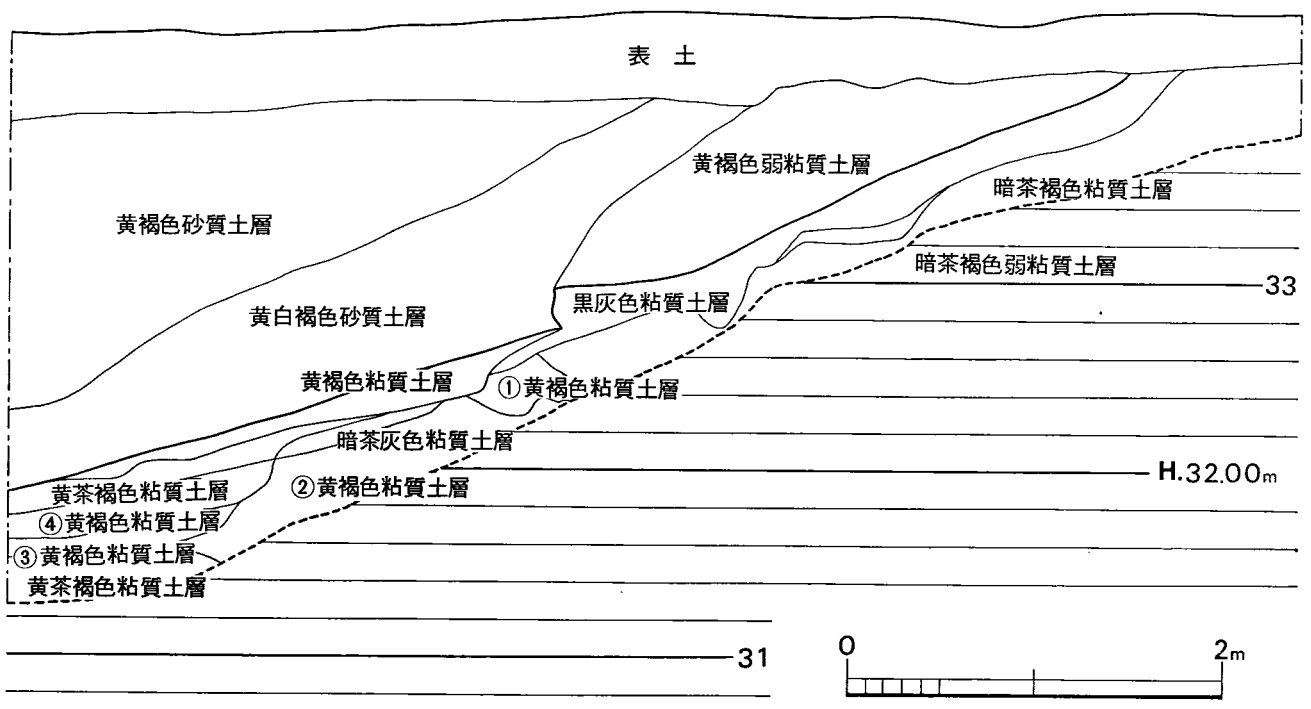


Fig10.　音丸城跡８Ｂトレンチ土層断面図（南側セクション）（1/40）

2. 発掘区の設定と層位 (Fig.8～10,PL.5～9)

城郭の構造をとらえることを目的として，11本の発掘区を設定した。1～5Tと9～11Tの発掘区では遺構をとらえることはできなかった。

6T～8Tまでの発掘区では，中世城郭を証明するような空濠が検出され，8Tの南端から五輪塔1基が出土した。城の存続年代と五輪塔の関係が問題として派出してきた。このトレンチによって，谷の幅を出すことにした。

6Tと7Tに存在していた当初土塁（PL.15）として考えられていたものは断面を切ることによって，ほぼこの城郭にともなうものではないことが判明した。

8AT・8BTによって地山の傾斜と地層の堆積状態をみるため設定した。

以上の11本のトレンチは，一応成果を上げた。

層　　位 (Fig.9.10)

8AT・8BTによって，旧地形の状態を代表して説明すると，8ATの断面から言えることは，表土層下は2回にわたって，大規模にうめている。

8BTでは，地山が徐々に傾斜角30°で落込んでいる状態を示めし，山際に若干1*m*～2*m*の巾の平坦面があったことを示めしている。

また谷巾は8Tにて理解でき，旧地形は割合い深い谷であったことが判断できる。

3. 遺構と遺物 (Fig.11～21,PL.10～21)

土　　塁 (Fig.11,PL.15)

尾根の続きはいったん切れ，高さ1*m*，巾2*m*の土塁がつづいて，天満神社につづく。これを境として6T・7Tを設定した。

断面を切ったところ6Tの表土層の上に，もったものと考えられた。この結果，当初のものではなく非常に新しいものと思われる。

Fig.11で示めすように断面は，大別すると4層にわかれている。暗灰褐色砂質土層がいわゆる表土層と同質のもので，波状の堆積を示めしているため，その下部には空濠となっている。このことは空濠をうずめた後の新しい時代に土塁をつくったもので，音丸城の時期のものではないことが判明した。

空濠の遺構を出すため除去した時，若干の遺物が出土している。近世の瓦と近世の陶器である。瓦は天満神社の葺替の時に捨てられたものをつかって土塁を築いたものと思われる。

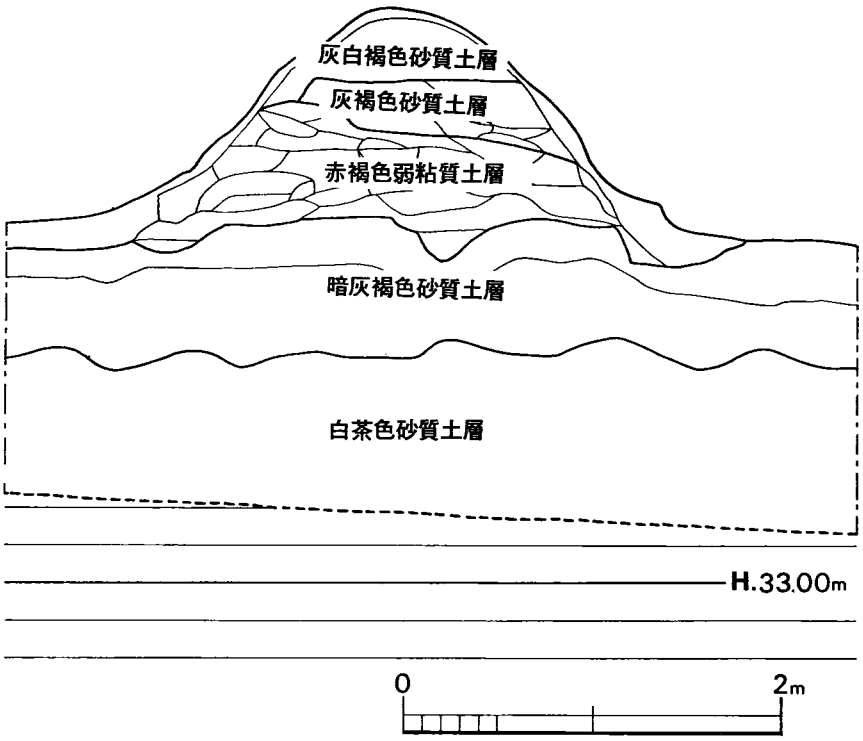


Fig.11. 音丸城遺跡土塁断面図（1/40）

土塁自体は近年につくられたものと考えられ，第2次大戦後，一時的に畑になったもので，その後，植林され桧林となっていたが樹令10～15年前後のものが多く，土塁の上には10年ものが植っていた。このことから土塁は地番境とも考えられる。

表土層 (Fig.12.13,PL.20)

表土層からの出土した遺物は，近世陶器類と瓦の破片や金属品等であった。量的にはポリ袋で3袋分できわめて少なかった。Fig.12・13で図示したものが主なものである。

近世陶器 (Fig.12,PL20) ①は三川内か波佐見で焼かれた有田系の皿形の磁器物で，見込みに窯印を打っている。この窯印は蒟蒻版とよばれる印版を使用しているもので，五弁花印判草花文様の染付けである。時期的には18世紀～19世紀にかけて製作されたもので，一種のくらわんか茶碗（註1）の皿である。

②は黒釉がかかった天目の土物の碗形で，胎土の粘土は砂が多く雑で精練されていない。土は灰黄褐色を呈し，釉のかけかたは右手にもって，釉につけこんだもので，高台脇に指跡が残

っている。一般的に黒釉のかかったものを，俗に天目と称するのであるから，この付近の民窯の中で焼かれたものと思われる。ただ，土物製であるから，高取・上野・唐津ぐらいで焼かれているものである。この中のものと考えられる。

①・②は一品ではなく雑器類である。

鉄砲玉（**Fig.**13-②**PL**,-20-③）鉛製で断面が中央がくぼんでいる，元込め銃のものではなく，筒の中に入れるもので旧式の種ケ島銃の弾玉である。

土　錘（**Fig**13-①,**PL**-20-④）魚をとる網のおもりである。

以上，４点が表土から出土したものの代表的なものである。

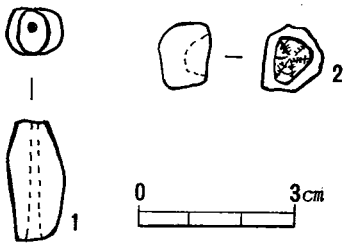


Fig.13.　出土遺物実測（⅔）

空　濠　（**Fig.**14～16,**PL.**12～14）

６**T**・７**T**で検出されたものである。土塁の下を東西方向に，切り通す。巾５～10*m*，深さ地山から1.5～2.5*m*で，長さは発掘された時28*m*である。尾根を東西方向にカットしてつくられているもので，尾根からみると濠底まで約５*m*の深さに達するもので，底からみると見上げるほど壮観なものである。**Fig.**15の断面図で示めすように，濠底巾が最も狭いところで３*m*である。

だんだん東に行くほど弧をえがく，西も同様である。全体は天満神社にむかって弧状を呈している。全長は50*m*前後で東は入りくんだ谷を巧みに利用し，西も谷側面を利用してつくっている空濠である。

Fig.16　は濠の層位図である。ほぼ７層に区別ができる。地山を45°の傾斜角をつけてカットし，底巾３*m*，

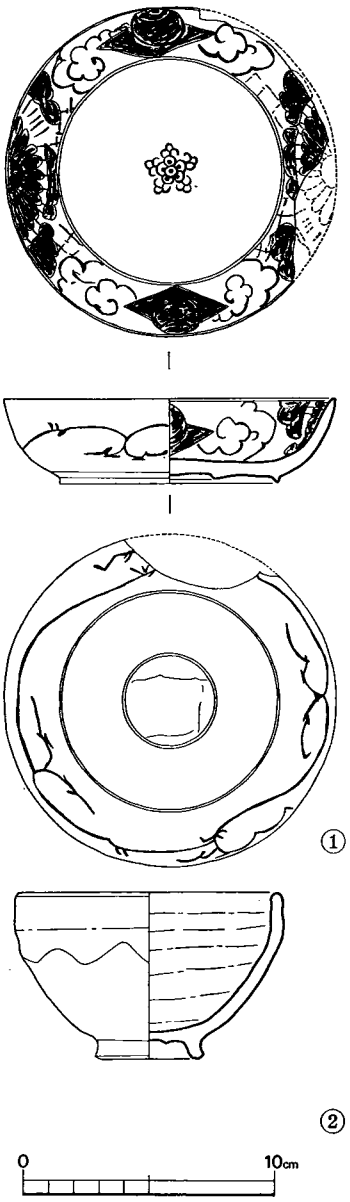


Fig.12.　出土遺物実測図（1/3）

底はほぼ水平である。

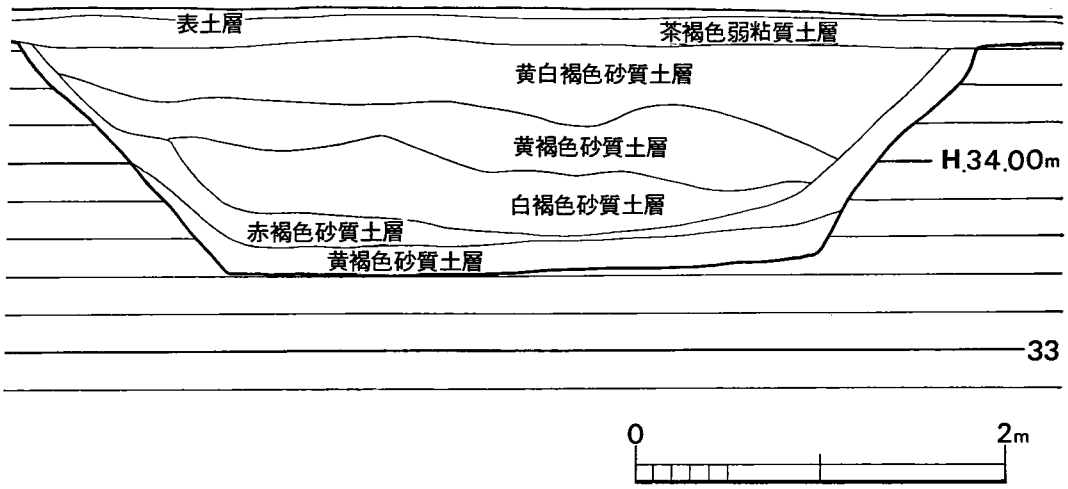


Fig.14. 空濠土層図（1/40）

3層までは順堆積で，4層以上については埋めるための盛土されたものであろう。空濠の上端巾が最狭の所がレベル的にも，高所で東西に行ほど低くなり，縦断面が凸の状態である。

遺　物　濠の底に張り付いた状態で，若干の土師器の小皿が出土している。遺物の保存状態が非常に悪く困難なもので，図示することができなかったが，底部は糸切が施されていた。

8 T出土の五輪塔　(Fig.17.18,PL.14～16)

地表から約150cmで五輪塔の火輪を検出した。順に下げていくと1基分完全にうずまった状態であった。それは火輪その下に水輪・地輪そして基礎石等が検出された。凡字等は刻まれてなかった。Fig.17がそれである。

出土状態からみて，五輪塔は風・空輪は基壇の石の側に落ち，火輪は半分に割られ，残りの半分は基壇の中に落ちこんでいた。水輪と地輪は原位置にあった。いわゆる四石五輪の形態をとるもので，石材は阿蘇凝灰岩である。一部を除き粗雑で概して下部は整っているがしかしそれも一部である。また前述したように五輪材片のあり方は当初の位置を動き，それが破損によるもので自然落下ではない。そうした状態にあったものを積み直した結果に因ると思われる。

このことは或地点から二次的に移動され，検出された場所に改葬されたものと考えられる。

Fig.18は五輪の復原して実測したものでその内法は風・空輪（20.6cm），火輪（17.6cm），水輪（22.6cm），地輪（16.2cm）で，全長は（74.6cm）である。火輪の笠の全体の感じからいって古い形を残している。

上部構造である五輪塔を除いた後，基壇の中の調査に移った。地輪を除いた基壇底は断面で

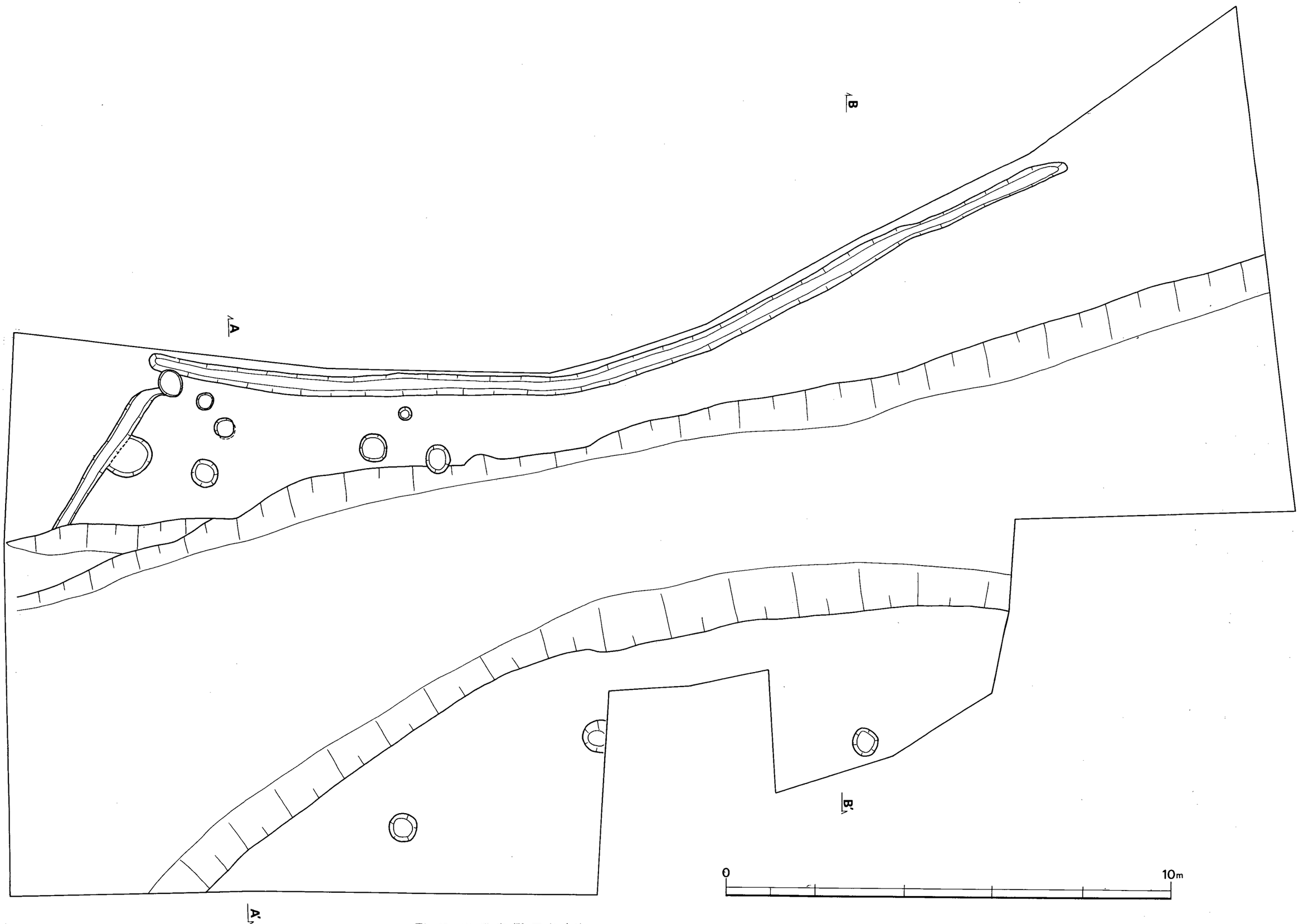


Fig.15. 空 濠 実 測 図 (1/40)

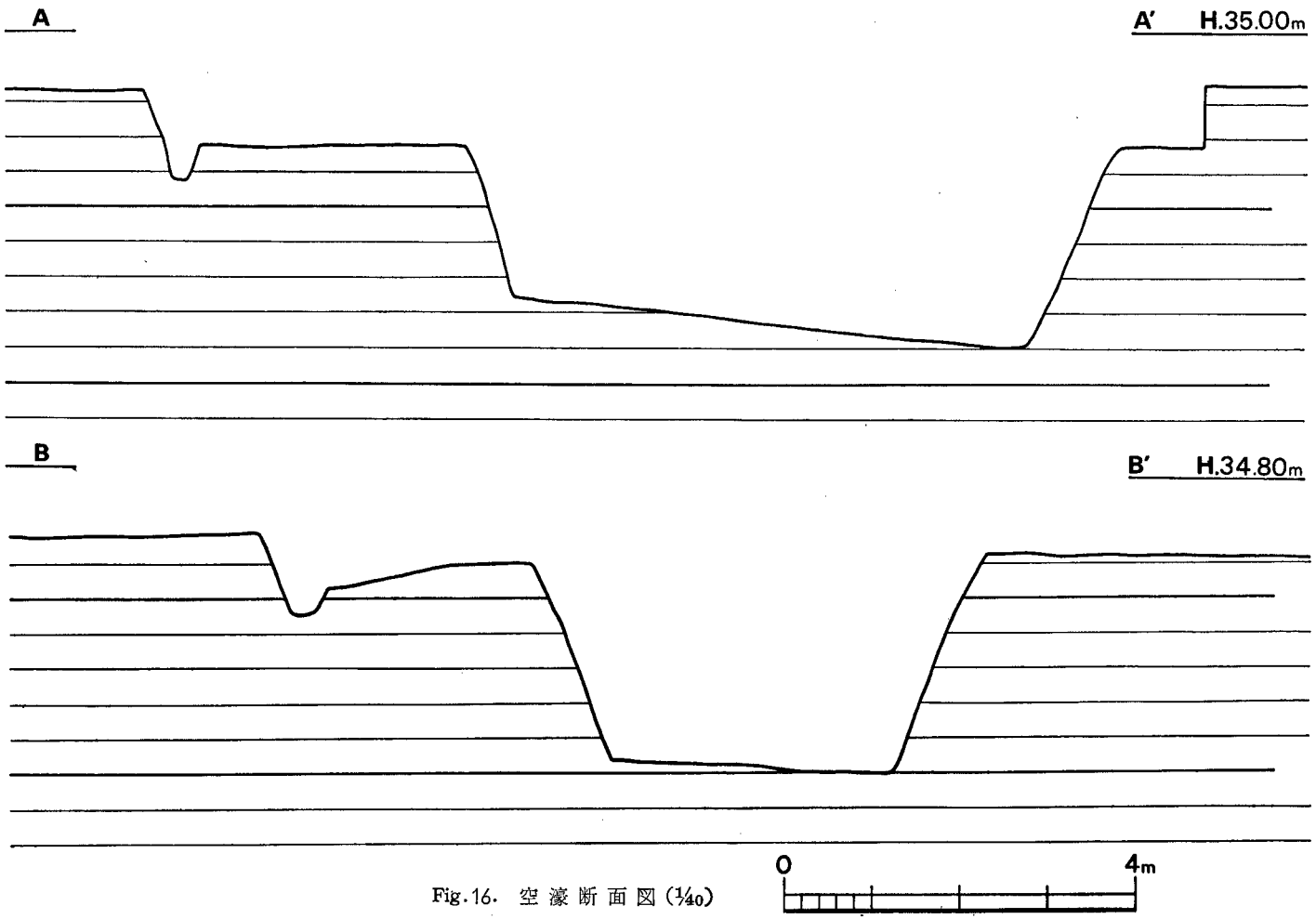


Fig.16. 空濠断面図(1/40)

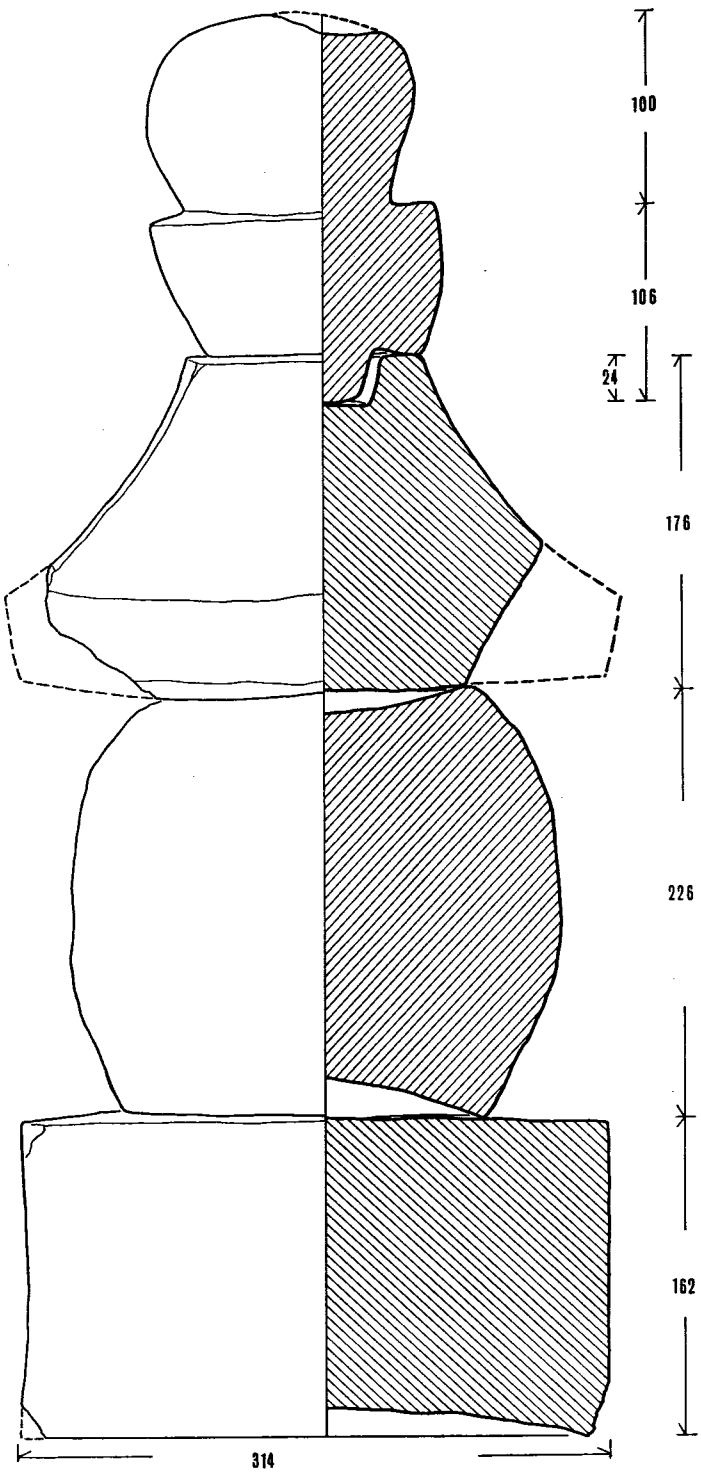


Fig.18. 音丸城遺跡出土五輪塔実測図（1/4，単位㎜）（⅔）

みると一応の箱型を呈しているが，完全なものではない。この中から，北宋銭が四枚，副葬品として検出された，火葬された骨は検出されなかった。北宋銭の四枚が六道銭として副葬されているわけである。

遺物（Fig.19,PL.17）

六道銭

六道銭として副葬された宋銭は4枚であった。完全なものは2枚で，他のものは破損していた。この中で，字体が判読できるものが3枚で，他1枚は判読できなかった。

熙寧元宝	1
元豊通宝	1
元祐通宝	1
字体不明	1

以上の銭は，北宋銭で神宗・哲宗帝（1068年～1093年）頃に鋳造されたものである。字体不明の1枚も宋銭であろう。

これらの北宋銭は12世紀中頃に，日本は銭貨流通が復活したことと，中国大陸では，銅鉱の科学的な精錬法で銅の生産量が飛躍的に増加した。こ

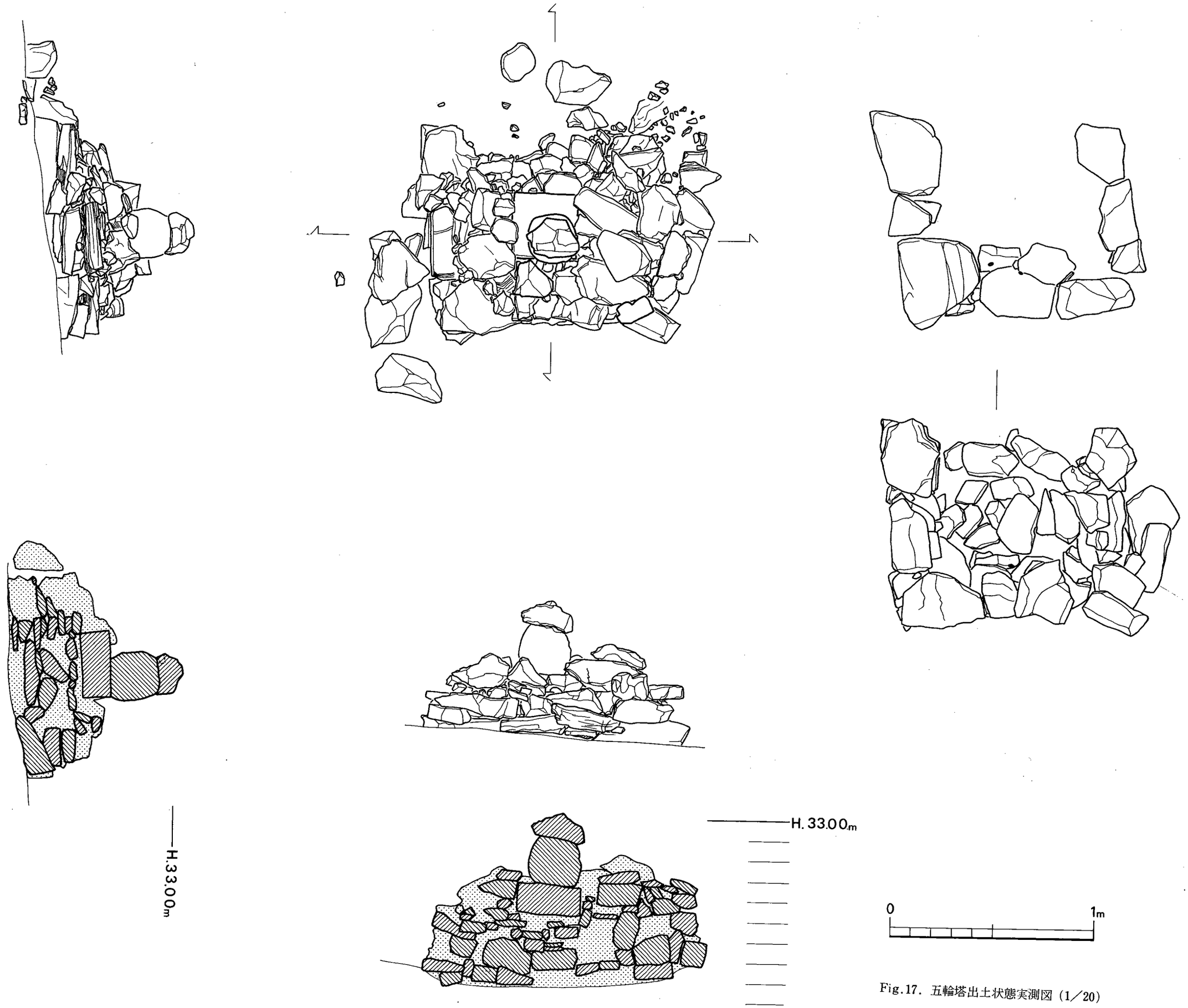


Fig.17. 五輪塔出土状態実測図（1／20）

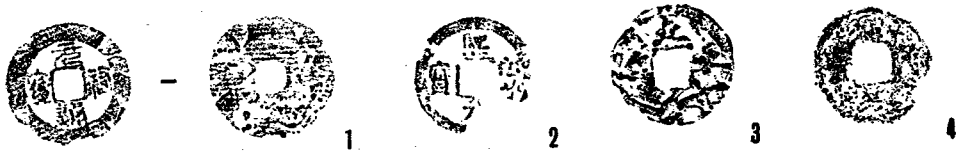


Fig.19.　出土遺物拓影図（六道銭）（⅔）

の結果毎年600万貫の銅銭が鋳造されるにいたった。しかし，宋は銭の不足に悩まされ，透漏銭の取締がなされたが，密貿易の形で，宋銅銭は海外に流出していった。

日本においても，日宋の貿易が拡大することによって，多量の銭貨が流入していった。

13世紀中頃には，宋銭が輸入品として多量に日本にはいっていった。例ば，1242年に西園寺公経の商船が，銭貨十万貫とその他のものをもたらしている（註２）。

それ以前には朝廷は貨幣の流通に対して禁止令を数回となく発令している（註３）。しかしながら宋銭は貿易品として流入してくる。これが基礎となって，流通貨幣となり，貨幣経済のありがたさを庶民階級まで知ることとなる。

その後，元朝になっても，宋銭は流入してくる（註４）。また日明貿易になって，鋳造された明銭（永楽通宝）も多量に持ち帰られ，これらの宋・明銭がかつ広く基準通貨となって流通した。これらの銅銭は19世紀中頃まで一文銭（ビタ銭）として流通したわけがある。

だからこそ六道銭として，後年庶民階級の墓から出土するわけである。寛永通宝が鋳造されて寛永年間以後の墓には六道銭として寛永通宝が副葬されるばあいが多くなってくる。

六道銭として宋銭を副葬した例は黒田長政の墓から出土したもので，皇宋通宝１・元聖通宝２・元豊通宝１・元祐通宝１・銭文不詳１であったことが知られている（註５）。

五輪塔の出土状態と副葬された六道銭としての宋銭からみて，剣岳の端城として位置付けられた音丸城と並列関係が生まれてくる。

五輪塔の形態としては古い形を残していることと，後述する周辺部から出土した一括の土師器等を考慮に入れると，この五輪塔は14世紀中頃から15世紀にかけてつくられたものと考えた方が妥当である。

五輪塔の周辺部から出土した一括土器

(**Fig**.20.21,**PL**.18.19)

五輪塔の50㎝北側に離れたところから一括した土師器の出土がみられた。

その出土状態は，炭化物を多量に含んだ固まりの中に一括して廃棄された状態で出土したものである。レベルは五輪の地輪ぐらいの高さで，東に低く西に高くというように斜に刺身状になっていた。出土した土師器は，杯・小皿が中心で，底部に糸切りが施してあった。

出土状態は **Fig**.20 である。この中に番号がうってあるものは，遺物実測図 **Fig**.21 の中にもある。また**PL**.19にも示されている。これを表にすると次のようになる。

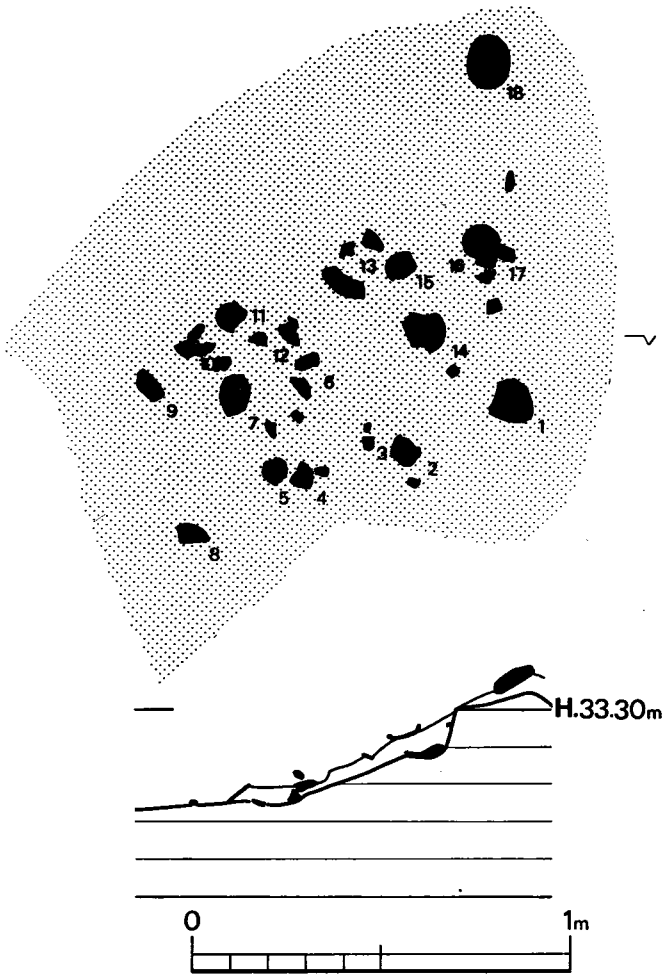


Fig.20. 五輪塔周辺部土師器出土状態実測図（1/20）網目は炭化物

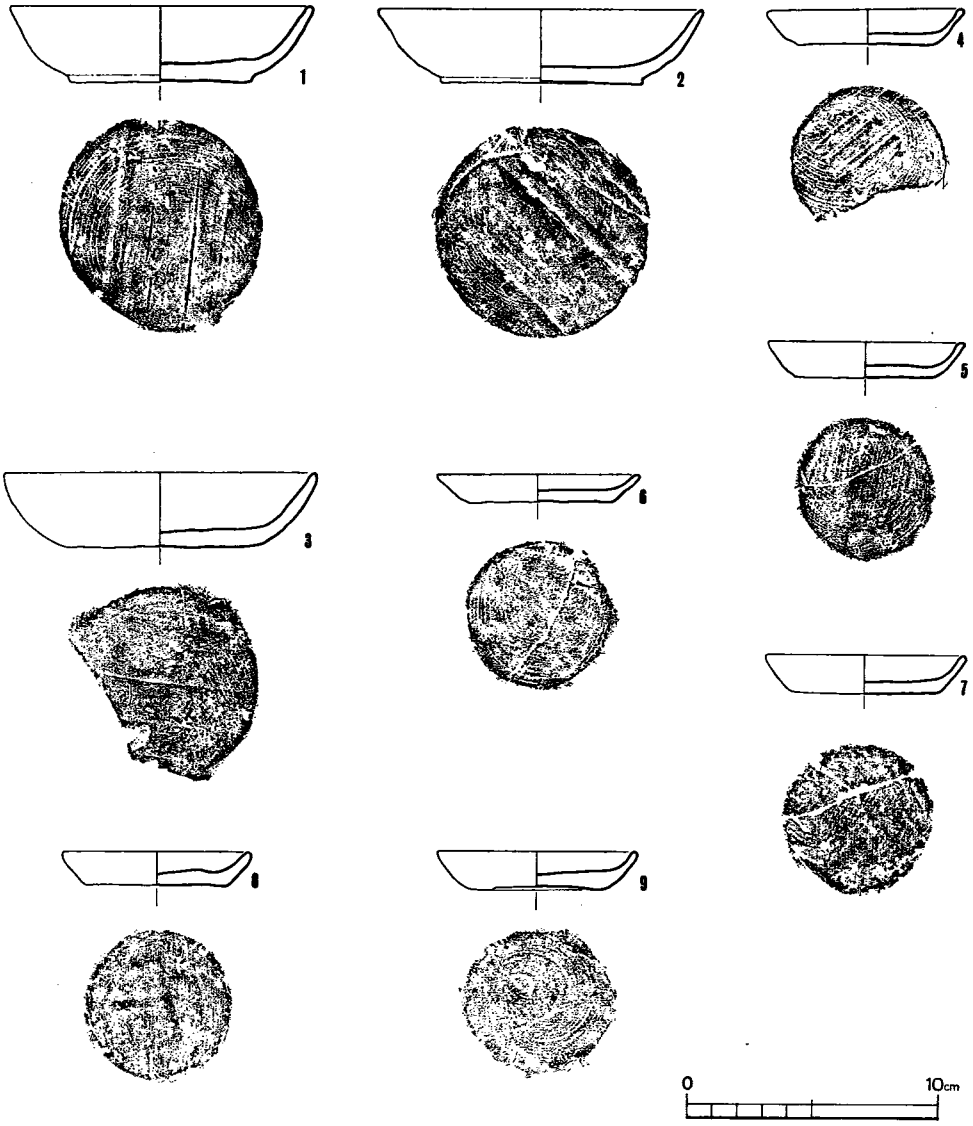


Fig.21. 出土遺物実測図（土師器）（1/3）

Tab.2. 土 師 器 計 測 表

番　号	口　径(cm)	器　高(cm)	底部径(cm)	PL.19	備　考
Fig.21—1	12.0	3.0	7.2	1	Fig20— 1
2	12.8	3.0	8.0	2	Fig20—16
3	12.4	2.9	7.9	3	Fig20—14
4	7.8	1.45	5.4	4	Fig20— 4
5	7.8	1.5	5.4	5	Fig20— 5
6	8.1	1.15	6.0	6	Fig20— 2
7	8.0	1.55	5.8	7	8T 3層中
8	7.5	1.35	5.6	8	Fig20— 3
9	8.0	1.55	5.0	9	Fig20—17

遺　物

各各の遺物について,Fig.21.にて説明を加えたい。また,Tab.2の計測表を参照にされたい。

土 師 器　(Fig.21,PL.19)

杯と**小皿**に分けることができる。

杯　(①～③) 口径は12～13cm, 器高は3cm前後で, 底部は7～8cmで糸切りで切り離されており, 乾燥時のおりの板目が残されている。胎土に砂粒子が混入して, 器面の剝落が著しく, 調整は不鮮明である。色調は黄褐色から赤褐色に近いもので, 焼成は良好であるが火のまわりがよくなく, 軟質である。①・②は底部近くで, 段がつくものである。

小　皿 (④～⑨) 口径は7.5～8.0cm, 器高は1.15～1.55cmの値をとり, 底部は5.4～6.0cmで, 糸切痕である。それに乾燥時の板目が若干ついている。胎土は精製された粘土を使用したものではなく, 砂が混入したものである。器面の剝離は著しく, 調整は不鮮明である。色調は黄褐色から赤褐色に近いもので, 焼成は軟弱で, 火のまわりが良くない。⑨は器内面に黒く炭化した部分が残っているため灯明皿として使用されたものと思われる。器面調整については剝落が激しく詳細な観察はむずかしいが, 外面を横なでし, 内底は縦なでであろうと推定される。器壁は口縁でうすく底部に向かうほど厚くなり, 断面が凸凹となっている。

以上のことから土師器については, 太宰府町の浦城跡出土(註6)の土師器のⅡ類のものに類似している。Ⅱ類は鎌倉期から室町にかけてと位置付けされていることを考え合わせると, 五輪塔周辺から出土した一括の土師器は, ほぼ同時期と考えても妥当であろう。

このことは, 五輪塔の推定年代とも一致するわけで, 音丸城の存続年代を把握するためにも一つの目安となる。

註

註1. くらわんか茶碗は, 大村藩内の諸窯で焼かれたものでくらわんか手と呼ばれる雑器, 胎土に鉄分を含み, ややくすんだ灰色を呈し, 厚手で, ときに黒く焦げた呉須で独特の筆致

で慣れきった絵付をする一群の染付である。くらわんかの名は，大阪淀川べりの安煮売屋が，川岸や船の客に売る肴を船の中から大声で売りつけたところからこの名称がくる。淀川の川底から多量の破片が得られる。最も安手の染付である。これらは伊万里の名で呼ばれはするが，有田では焼かれず，波佐見から三川内を中心とする地方が生産地である。雑器中の雑器で他のものより火度が低い。見込みの窯印は蒟蒻版と呼ばれる印版であり，安南染付の影響を受けている。

馬場強氏が長与皿山の発掘において，くらわんか茶碗で淀川川底出土ものと長与出土のものが一致したことを述べている。

馬場強・下川達弥『「長与焼の研究」一長与皿山古窯物原発掘報告書一』長崎県長与町教育委員会 1974

註2. 「○7月，西園寺公経の商船，宋より銭貨十万貫・鸚鵡・水牛等を載せて帰朝」（故一品記）

註3. 『玉葉』巻31 治承三年七月二五日条

同前文治三年六月十三日条

『仲資王記』，文治五年九月六日条

『玉葉』建久三年十月一日条

森克己「宋銅銭流通への基盤」『日本歴史』300号 1973，を参照とした。

註4. 元代はほとんど銅銭を造らず紙幣に依存していた。

註5. 森克己「銭の生命一宋銅銭の流通一」『日本歴史』272号 1970

註6. 宮小路賀宏・栗原和彦・前川威洋『「浦城跡」一筑紫郡太宰府町所在中世城跡の調査一』福岡県文化財調査報告書45 1970 福岡県教育委員会

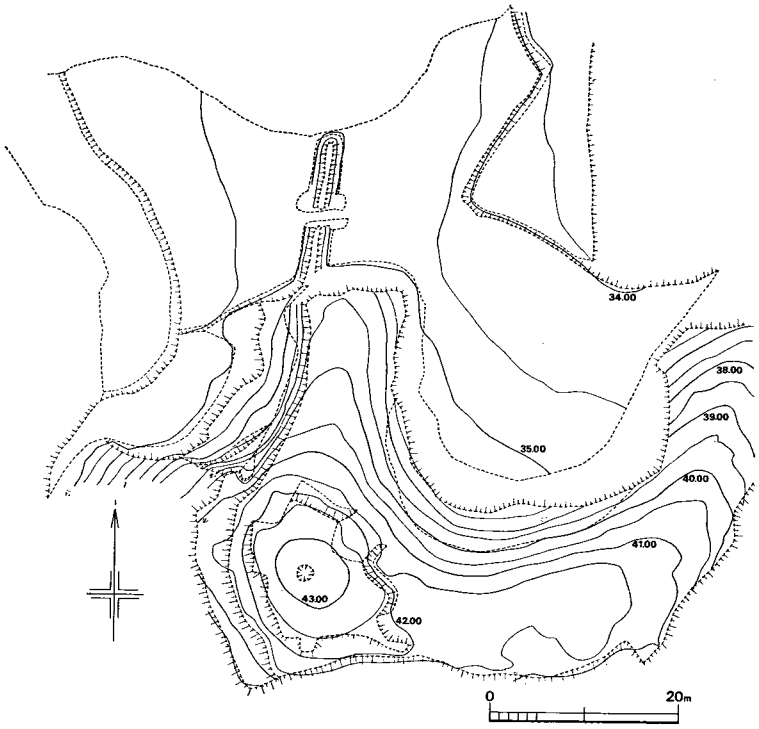


Fig.22. 現 況 地 形 図 (1/800)

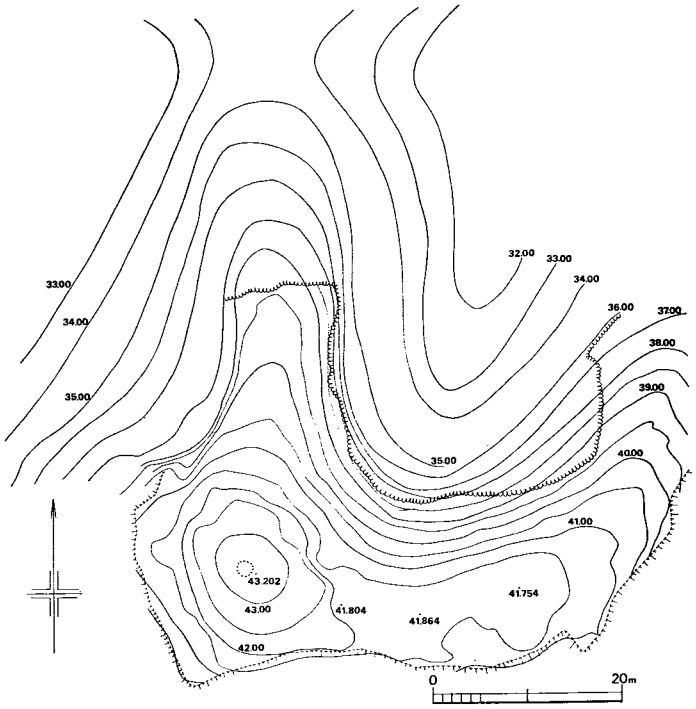


Fig.23. 復原地形図 (1/800)

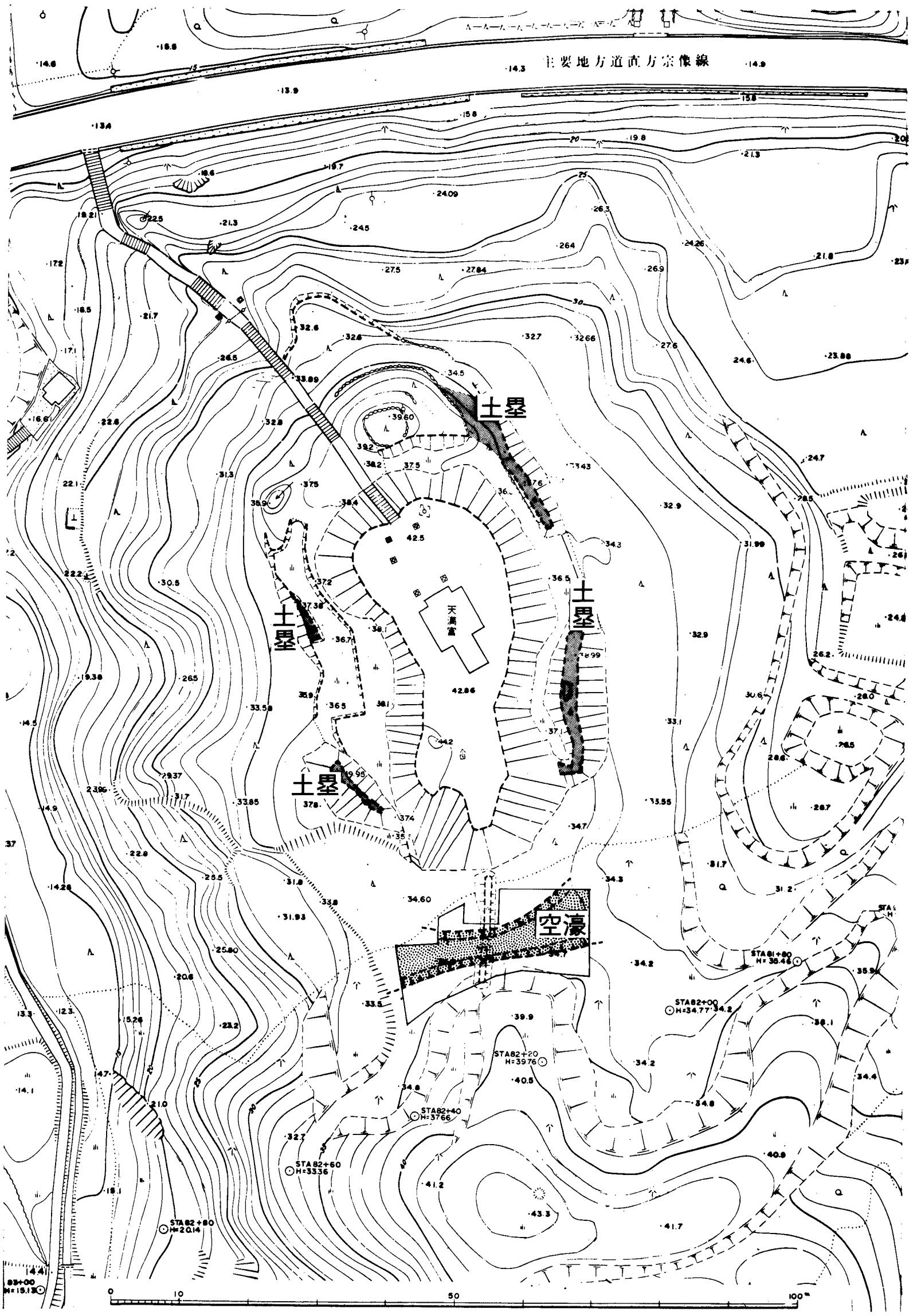


Fig.25. 音 丸 城 の 防 禦 網 (1／1,000)

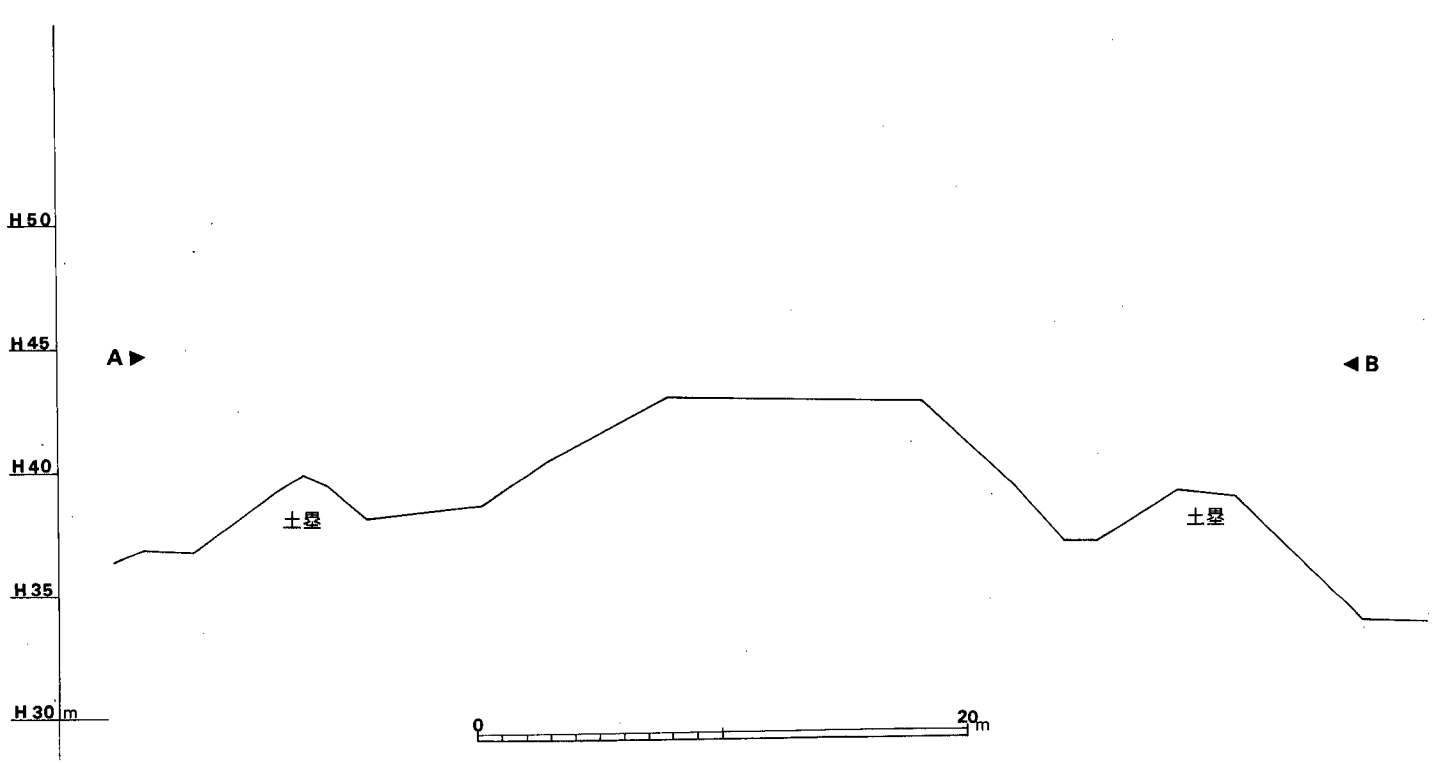


Fig. 26. 音 丸 城 の 縦 断 面 (1／400) (Fig. 7 付図参照の事)

4. 小　　結

今回の発掘調査で理解できたことを若干述べて，その成果としたい。

1. 発掘調査によって，空濠を検出したことは音丸城の防禦を知る上で重要な点となった。補足を加えると。

音丸城の防禦網は，**Fig.**22と**Fig.**23から現況地形と旧地形の復原地形図によって，丘陵上の尾根線は，天満神社の位置する丘陵と直結し舌状台地をなしていたと考えられる。また**Fig.**24は字図である。貴船谷は六ケ岳の舌状部と音丸の丘陵とを切断するものである。これが，第一の防禦である。音丸の丘陵はカタカナの「ク」の字を思わせるもので，まん中に谷が入り込んでいる。その長い部分をカットして空濠をつくって，独立させたもので，コの字の桝形を呈するわけである。まん中に谷，周辺部もまた谷で，三方が谷となっているわけで，これが1の構とし，2の構として，空濠と土塁とで中心部を防禦している。尾根づたいにくるものは，空濠で防ぎ，前面から登ってくるものは土塁で防ぐ，**PL.**21は土塁の状態である。**Fig.**25は防禦網の2の構を図示したものである。その断面図は**Fig.**27の通りである。現在の天満神社ができたのが江戸時代の初めであるため，その時期まで平坦面が存在していたことは理解できる。その平坦面から見る展望は猿田峠から西の山麓を中心に展開する。西方防禦の要の位置となる。

2. 剣岳城と音丸城との関係

剣岳城が本城で音丸城は端城（出城）であったことはまちがいないものと思われる。そのことは，文書による裏付である。このことについては次章の中で，詳細に説明する。

空濠があったことと，土塁のことは発掘によって明確になったわけで，本城と出城の関係からみると，平時は無人もしくは少数の城番や番所的な砦としての性格を持ち，基本的には属性で，本城があって出城となるわけで，一群のものとして防禦を受けもつものである。しかしながら単独でもある程度の防禦はできるわけで，本城に対して，1の構となるわけである。

3. 音丸城の存続年代は，15～16世紀にかけての戦国時代が中心であり，剣岳城の存続とに重大な関係がある。

Fig.27. 天満神社神殿

4. 五輪塔の出土と音丸城との関係

は，時期的にはほぼ一致するが，五輪塔が墓として形をなしていた時は，音丸城が存在していたかどうかは不明である，しかし，ある時期並列していたことは推測される。

5．五輪塔の形態，出土遺物やその他の状況から14世紀から15世紀ごろに位置付けることが妥当ではなかろうか。

6．空濠を埋め整地した時期については，この大工事を行なったその時期は江戸時代の始め頃で，完全に廃絶されたと推測される。そして，土塁はそのままで，平担地が神社の創設となるわけである。破壊された時期は，1618年(元和3)の一国一城制と，寛永年間の島原の乱（1637）の折に完全に破壊され，埋められたものと思われる。その折，五輪塔も埋没した。

以上が今回の調査の結果である。路線内で空濠と五輪塔が破壊されるが，音丸城に関する限り路線外に大部分の土塁線が残る。このことは不幸中の幸であった。

（副島邦弘）

音丸城遺跡

図版

発掘前の遺跡群

音丸城遺跡俯瞰航空写真　(東から)

(1) 伐 採 後 全 景　　（東から）

(2) 伐 採 後 全 景　　（西から）

(1) トレンチ全景　　(南から)

(2) トレンチ全景　　(西から)

(1) 土 墨 全 景　　（東から）

(2) 土 墨 近 景　　（北から）

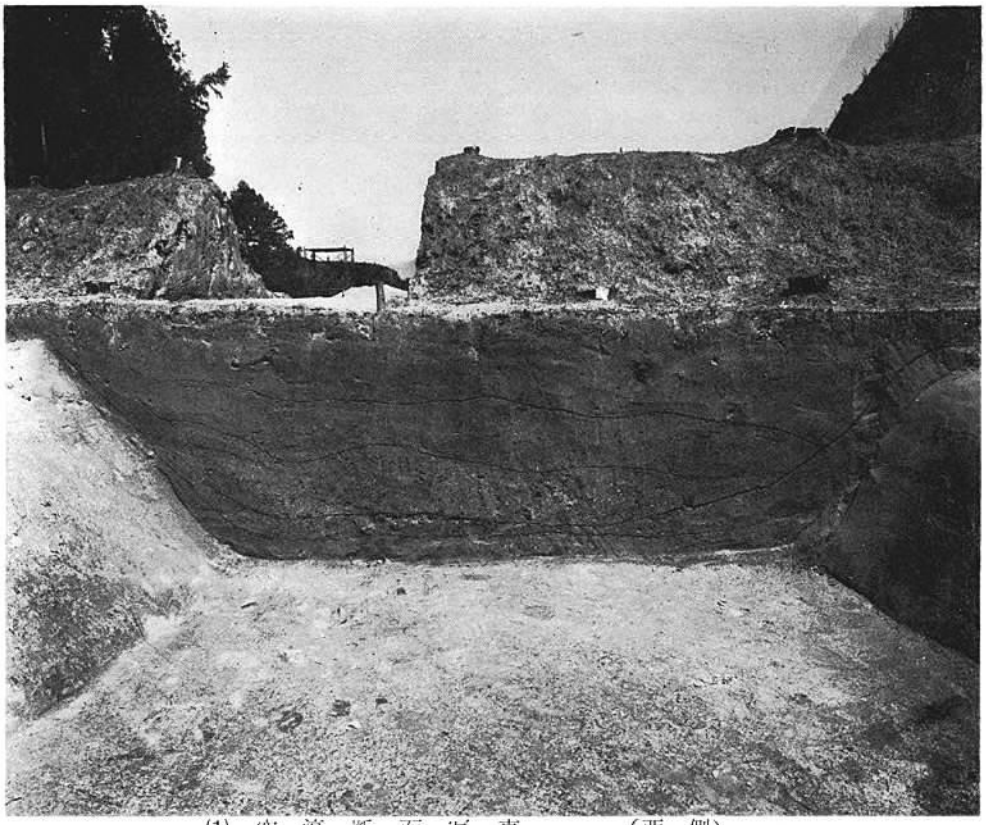
(1) 土墨と空濠との関係

(2) 土墨断面写真

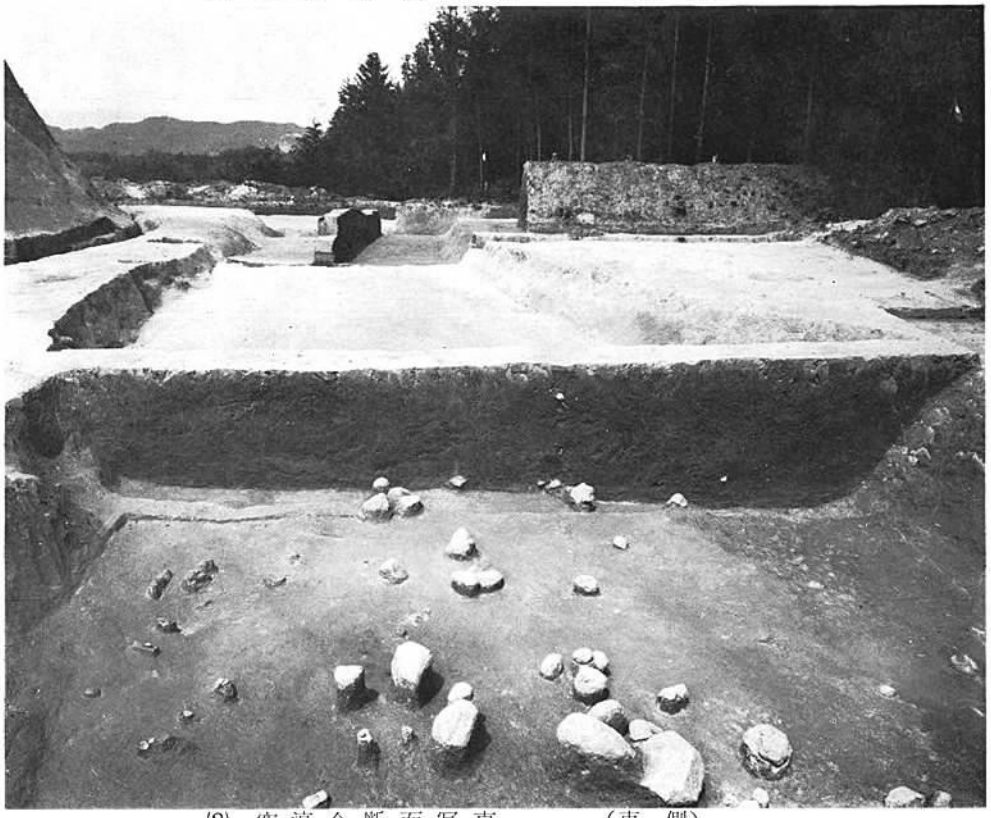
空 濠 の 出 土 状 態　　（南から）

(1) 空 濠 全 景　　(東から)

(2) 空 濠 全 景　　(西から)



(1) 空 濠 断 面 写 真　　(西 側)



(2) 空 濠 全 断 面 写 真　　(東 側)

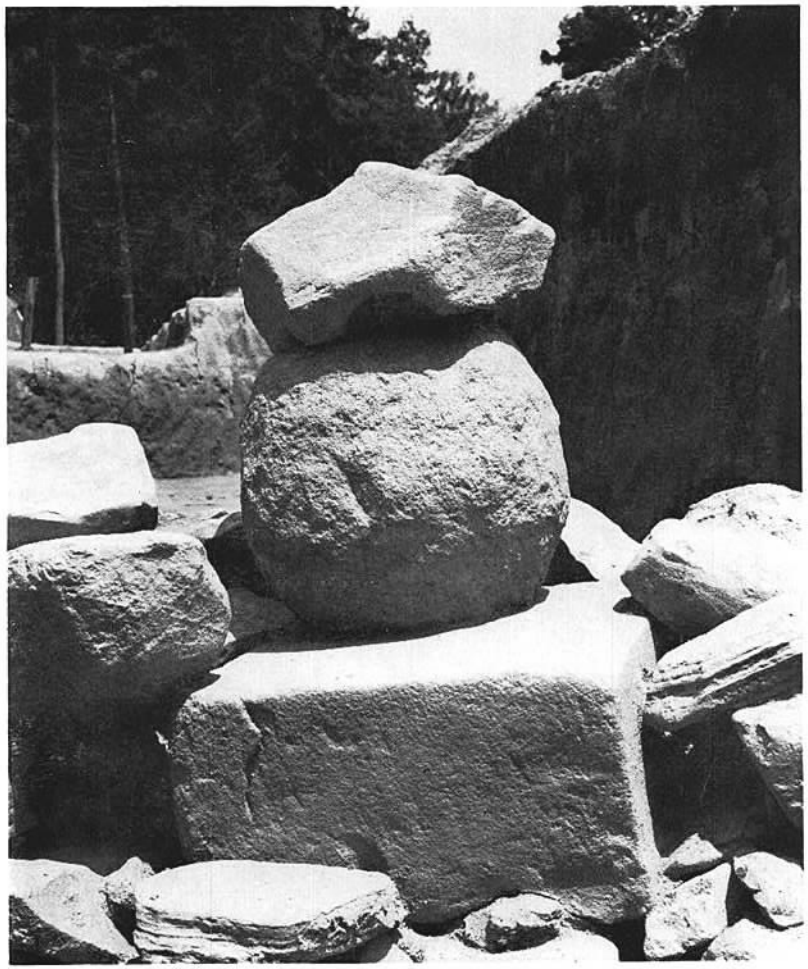
(1) 五輪塔出土状態　　（南から）

(2) 五輪塔出土状態　　（北から）

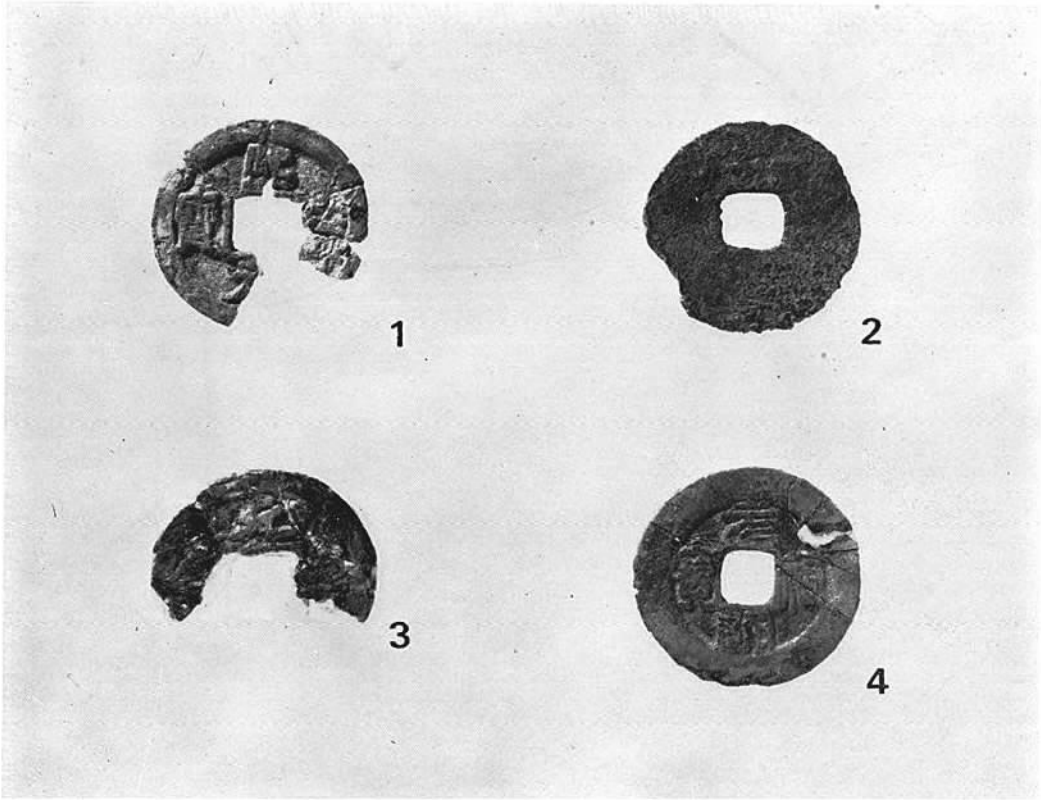
(1) 上部構造をはずした状態と六道銭出土状態

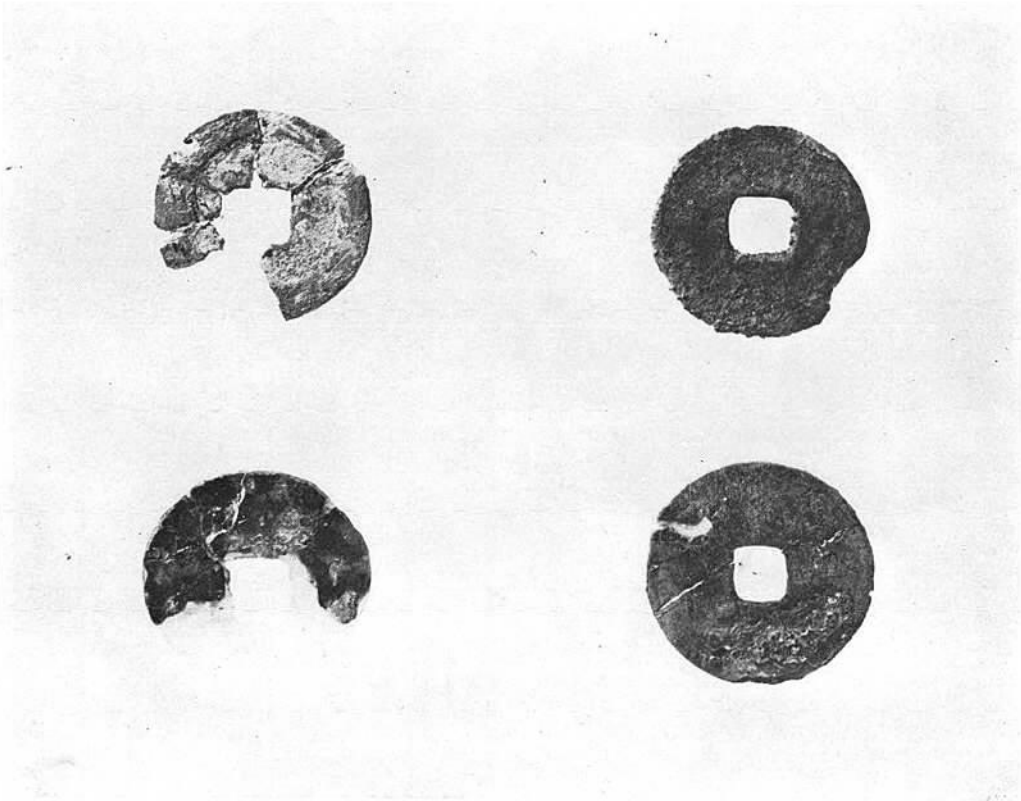
(2) 腰石の状態と六道銭の出土状態

(2) 五輪塔復原の状態



(1) 五輪塔出土状態　（北から）





出土六道銭（宋銅銭）　上（表）　下（裏）

五輪塔周辺の土師器出土状態

1

6

2

7

3

8

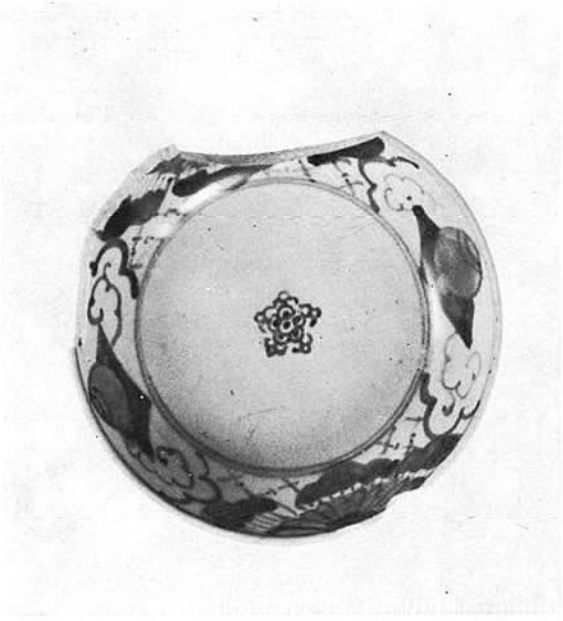
4

9

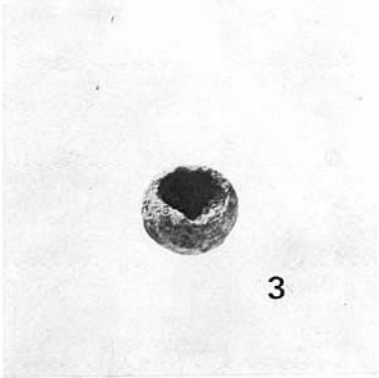
5

10

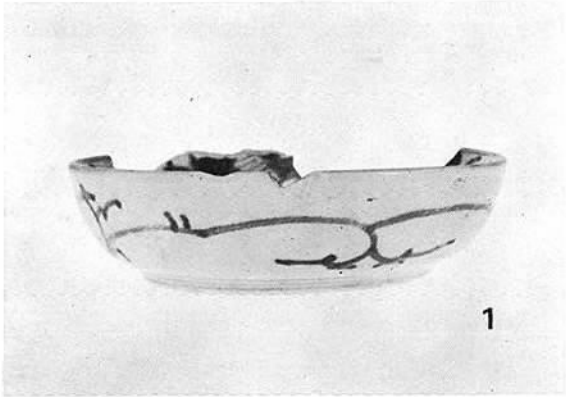
出 土 遺 物　　(土師器)



2



3

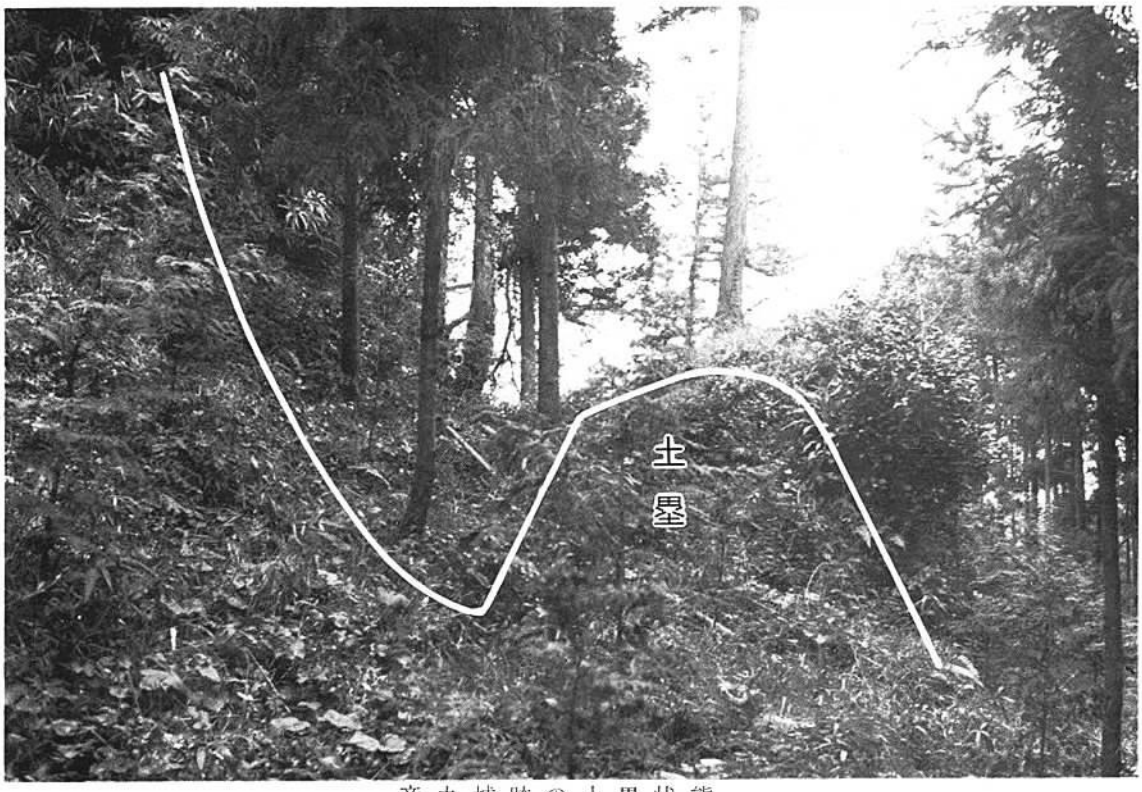


1

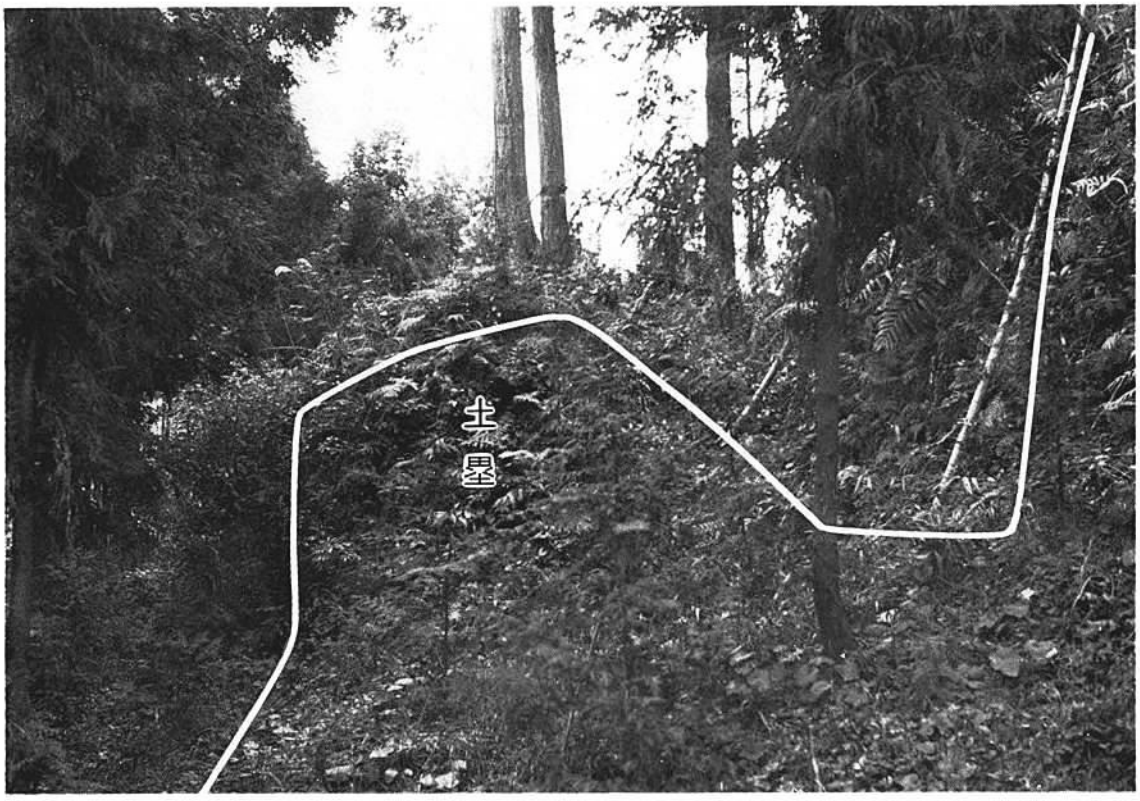
4

1. くらわんか茶砲
2. 天　　目
3. 弾　　丸
4. 土　　錘

出土遺物表土層　　(陶磁器・その他)



音丸城跡の土塁状態



音丸城跡の土塁状態

後牟田遺跡の発掘調査

（鞍手郡鞍手町大字中山字後牟田所在）

本 文 目 次

頁
1．はじめに ……31
2．調査の記録 ……31
3．遺物と遺構 ……31
4．小結 ……31

後牟田遺跡の発掘調査

1. はじめに

後牟田遺跡は鞍手郡鞍手町大字中山字後牟田にある。

剣岳山塊の舌状台地と谷間を狭んで，六ケ岳の舌状台地がのびている。前者に中屋敷遺跡，後者に後牟田遺跡が存在する。

一応，歴史時代散布地としてリストアップされていた。

調査は昭和50年10月20日から10月27日までの間に側道部分にあたる宅地とその周辺部を対象地域とした。

今回は３本のトレンテを入れたが，どの発掘地区からも遺構の検出はみられなく，地山をカットして宅地をつくったもので，表土を剝ぐと即，地山にあたった。道路に近い前庭部の畑については，近世になって土を盛土して畑としたものであった。

この結果を踏まえて，翌年本線部分にあたる畑に発掘区を設定し，調査期間を10日間として，昭和51年７月５日から７月15日を充てた。

調査関係者はつぎの通り。

調査担当者	福岡県教育委員会文化課	技師	副島邦弘
調査補助員			平ノ内幸治
庶務担当	福岡県教育委員会文化課	主事	山本文和

2. 調査の記録

その調査結果は，耕作土の下に粘土質の黒褐色土で，内部にボタを含んでいる。その下に青黒色の粘土層がある。そして地山は花崗岩バイラン土である。51年度の調査では一条の幅30cm前後の排水溝と思われる溝が検出されたが，傾斜面の肩の部分に位置する。傾斜は45°の角度で西南側の道路に落ち込む，トレンチの端では湧水が出て，青色粘土の堆積がみられる。

この結果より，道路より西南側は谷間で湿地であったと考えられる。

3. 遺物と遺構 (PL.22)

遺構は一条の溝で，排水溝であった。溝にともなう遺物はみられなく，表土層より近世陶器片や土師器片が若干採集されたのみであった。

4. 小　結

前述のごとく，遺跡としては近代になって埋めたてられて畑になったもので，それ以前は溜池の端の狭少な平坦地として存在していたものと推測される。　（副島邦弘）

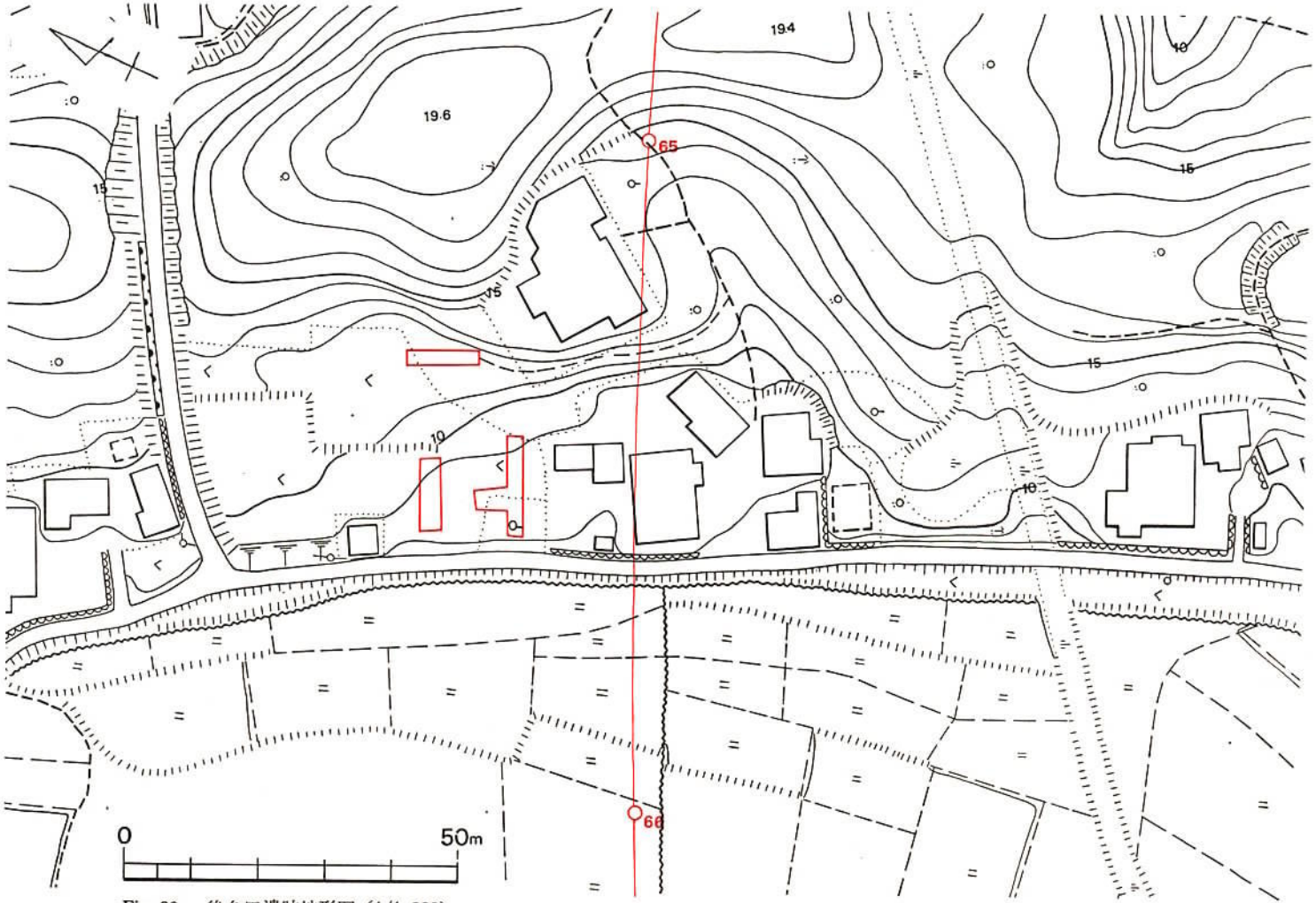


Fig.28. 後牟田遺跡地形図 (1/1.000)

後牟田遺跡

図　版

後牟田遺跡トレンチ全景

IV. 考　　察

発掘調査の結果

音丸城跡の歴史的背景

鞍手町関係年表

福岡県中世山城地名表

発掘調査の結果

本報告書は鞍手地区の３遺跡についての発掘調査の記録をまとめたものである。

その中でも主に中世山城の**音丸城跡**を中心としてまとめた。

大内氏・大友氏の勢力圏内にあって，ある時期には大内氏に，ある時期には大友氏にと，その時の力関係が変化することによって，天秤としての位置を占めるのである。

その勢力がなくなる秀吉の統一まで，この地域は天秤として出入するのである。

剣岳城の出城の一つである音丸城の存在価値がなくなるのは，統一後でその役目を終了している。

段の上遺跡は歴史時代の土塁と散布地としてリストアップされていたが，土塁は即，地境として理解され，遺構の検出はみられず，若干の遺物が出土した。

後牟田遺跡は散布地としてリストに上げられていたが，これらの採集遺物は二次堆積土の中からのものであった。

この他にも**未森遺跡・力石遺跡**についても遺構確認調査を行なったが，路線内には遺構がないこともあって，本調査の範囲から省かれた。

以上のことをまとめてみると，

1. 段の上遺跡は，土塁線は字境であると断定した。
2. 音丸城跡は地方文書の書きあげ帳を裏付けることができ，空濠を検出した。また，五輪塔を検出し，存続年代を明確にすることを追及した。
3. 後牟田遺跡は二次堆積であり，明治以後の新しい時期に，低湿地を埋めている。

この３項目をもって，本報告書のまとめにしたい。　（副島邦弘）

音丸城の歴史的背景

I

福岡県鞍手郡鞍手町大字新北（旧筑前国鞍手郡新北村）に鎮座する旧村社の熱田神社（現神職は金川明敏氏）には主として近世関係の古文書や古記録類が多数所蔵されており，地元の関係者の間では「金川文書」と総称されている。[註1] その１つに文政３年（1820）３月の年紀をもつ同村の「続風土記附録御調子書上帳」と題し，「村方ひかへ」と註記された書冊がある。[註2] それは表紙を含めて全８紙というごく薄いものであり，内容的には同村の村域の四至や社寺の堂宇に関する記載が大部分を占めているが，それの「名所古并 並古城古戦場之事」という項には次のような一節が見られる。

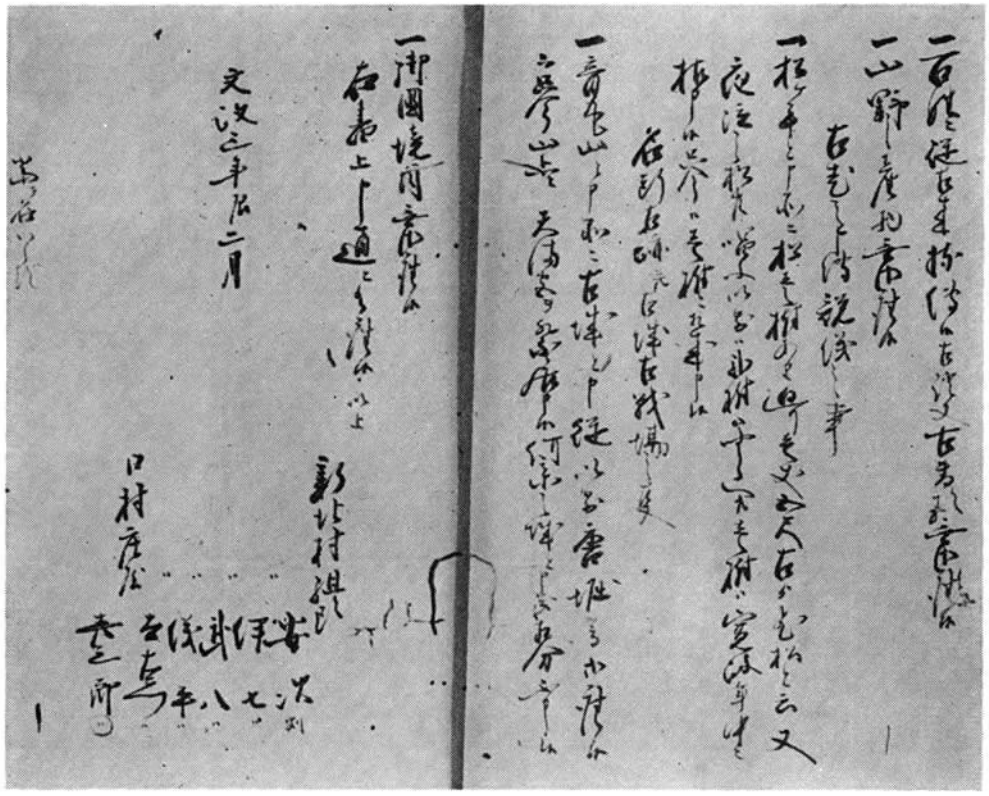


Fig.29. 「続風土記附録御調子書上帳」音丸城記載の部分

一　音丸山と申所ニ古城と申し，従以前唐堀等御座候而，只今は山上ニ天満宮ヲ祭居申候，何某の城と申儀相分不申候（読点筆者）

現在も，この大字新北地区には音丸という小字名の一画が所在し，同所の小高い丘の上には天満神社（天満宮）の小祠が祭られている。この「書上帳」ではそこに古城跡および唐堀すなわち空濠が存在することは指摘されているが，それ本来の城名は記されず，また代表的な城主名についても不明とされている。そこで，今回の調査に際しては，その城を小字名にもとづいて「音丸城」と仮称したのであるが，後述のように，管見の限りでは，この「書上帳」が音丸城に関する唯一の文献史料と言っても過言ではないように考えられる。

II

ところで，この「書上帳」の書名に見える「続風土記附録」が18世紀末に編録された「筑前国続風土記附録」の略称であることはあらためて言うまでもないが，これと「書上帳」との関係については必ずしも明らかではないように思われる。そこで，本節では，本論に先立って，まずこの点について若干の検討を行ない，それによって「書上帳」の史料としての性格などについても少しく述べておきたいと思う。

近世の筑前黒田藩においては，もちろんそれが当藩のみに特徴的な事象でないことは言うまでもないが，藩命にもとづく地誌の編纂が積極的に行なわれている。この「書上帳」もその過程において作製されたものであるので，まず当藩における地誌編纂の経緯について見てみよう。

まず，元禄元年（1688）には，当代一流の儒者として知られる貝原篤信（益軒）が筑前の地誌編纂を命ぜられた。彼は甥の好古や高弟の竹田定直などとともにそれに従事し，同16年には一応成稿させて上進したが，その後も増補改訂を行ない，宝永６年（1709）に至ってようやく全30巻を完成させた。そして奈良時代に撰進された「風土記」にならって，それを「筑前国続風土記」と命名し，翌７年に藩主に献上した。なお，「提要」を巻頭として福岡・博多以下国内15郡(註3)ごとに編述し，さらに「土産考」などの特殊編目を続ける体裁はこれに継続する二地誌においてもほぼ継承されている。

ついで，天明４年(1784)には，加藤一純がこの「筑前国続風土記」の補足訂正を命ぜられ，鷹取周成を助録者としてその編纂に当り，寛政５年（1793）に40巻の編録を終えた。同年５月の彼の死後も周成が続撰を命ぜられ，国学者でもある青柳種信の助修を得て，同１０年に「提要」，「土産考」など10巻を加えた「筑前国続風土記附録」全50巻を完成させた。これは「河水記」を特輯したことや主要社寺などの絵図を付載したことなど他の地誌には見られない大きな特徴を有している。

文化11年（1814）には，青柳種信がこの「筑前国続風土記附録」を補足訂正すべき藩命を受けて史局を開き，国内諸郡を巡回調査して編纂に当ったが，中途の天保６年（1835）に死去し

た。そのため事業は彼の息子の種春や門人などによって継承されたが，それもいつしか中断され，やがて彼らの死などにともなってついに完成されることなく中絶された。しかし文久年間(1861～63)に至って，種信の門人でその編纂を補佐していた坂田良賢がこれの中絶を惜み，最終稿本を浄書した。それが「筑前国続風土記拾遺」30巻として現在に伝えられているのであるが，かかる事情によるためか，それには編著者のほかに数名の校正者の名が列記されている。

以上，「筑前国続風土記」以下の藩命にもとづく三地誌の編纂の経緯についてきわめて概略的に整理したのであるが，これからも明らかなように，「書上帳」に見える文政3年は「続風土記附録」が完成した寛政10年から既に20年以上を経過しているのである。文政3年は「書上帳」が作製された年と推定できるので，時間的に見ても，この「書上帳」が「続風土記附録」の編纂に際して直接的な資料として用いられたものでないことは明らかである。

かかる両者の関係についてはいくつかの場合を想定できるが，直ちにそのいずれとも断定することは少なからず困難なように思われる。たとえば，寛政年間の加藤一純らによる「続風土記附録」編纂のための調査に際して，地方は在地に関する諸事項を書き上げ，文政3年に至ってそれをあらためて「書上帳」の「村方ひかへ」として再製したのではないかと考えられる。しかし「書上帳」の記載内容などからみて，文政3年に20数年前の記録をあらためて再製しなければならない必然性は認められず，さらにこの文政年間には青柳種信による「続風土記拾遺」の編纂が進行中であることを考慮すれば，この想定は若干妥当性に欠けると言うべきであろう。これに対して，「書上帳」の書名に見える「続風土記附録御調子」（傍点筆者）というのは，既に「続風土記附録」の存在を前提にしていると考えられるので，その「御調子」は「続風土記附録」の編纂を目的とした調査ではなく，それの補足訂正である「続風土記拾遺」の編纂にともなう種信による調査と解したほうが，両者の成立時期にかかわる時間的な前後関係からみても妥当と言うべきではないだろうか。つまり，種信による国内諸郡の巡回調査に際して，新北村の村方は同村にかかわる諸事項について書き上げた書冊すなわち書上帳を提出したが，同時にそれの副本をも作製して正本に対する「村方ひかへ」として地元に保管した。それがこの「書上帳」ではないかと考えられるのであるが，としても，それが熱田神社の所蔵に帰した経緯などについては現在のところ明らかにしえていない。

「続風土記附録」および「続風土記拾遺」のいずれにおいてもこの音丸城については全く言及されておらず，それのみか新北村そのものについての記述も両者ともにきわめて簡略である。また「書上帳」そのものにしても，社寺の堂宇についての記述が大部分を占めているため，それがこれらの地誌編纂に際してどの程度利用されたかの判定は困難と言わねばならない。他の諸郡の例などとも比較検討しなければならないので，前述のような時間的経過からみれば，後者の場合すなわち「続風土記拾遺」の編纂にともなう調査に際して作製されたとみなす場合により可能性は認められるが，この点については今しばらく後考を俟ちたいと思う。(註4)

なお，これに関連して，伊藤常足とその著「太宰管内志」の存在も看過できないと考えられるので，ここで若干を付言しておきたいと考える。周知のように，彼は旧鞍手郡古門村（現鞍手町大字古門）に鎮座する古物神社の神職であったが，文化元年（1804）に古代における大宰府が総管した西海道9国2島すなわち九州全域の地誌の編纂に着手し，前述の「筑前国続風土記」以下の先行地誌を参照しつつ，また広く史書を参看しながら，30年以上におよぶ長年月を費して天保12年（1841）に「太宰管内志」82巻の大著を完成させた。「筑前国続風土記」以下の三編が藩命にもとづいて編纂されたものであるのに対して，この「管内志」は常足という在野の一知識人によって編纂されたものであり，さらに筑前国のみを対象とした前三者に対して，藩という行政区域にはとらわれず，「太宰管内」という表現に象徴されるような九州全域というより広範な地域を対象としている点に大きな特徴が認められる。

現在ではかつての古門・新北両村ともに鞍手町の一部となっているように，この両村は地理的にもきわめて近接しており，古門村に居住する常足にとって新北村はいわゆる地元とみなしてもよい地域であり，とすれば，彼が新北村に所在する音丸城についての認識を有しなかったとは考えがたい。また「管内志」においても，筑前国に関しては82巻中の26巻を充て，古城や古戦場などのいわゆる兵事に関する事項についてはかなりの大部を割いて詳述しているにもかかわらず，音丸城については全く言及していないのである。その理由は明らかでないが，「管内志」が337部という多くの文献史料を引用しつつ著述されていることを考慮すれば，音丸城については「書上帳」以外の文献史料が存在せず，また彼自身もその「書上帳」を利用しうる立場にないことも無関係ではないように考えられる。それとも，彼は音丸城についてとくに言及するだけの価値を認めなかったのであろうか。

Ⅲ

さて，古城古戦場に関してとくに5巻を充てた「筑前国続風土記」をはじめとして，近世に編纂された筑前地方に関する四大地誌は，社寺あるいは名所古跡などについてはかなり詳述しているが，この音丸城に関しては全く言及していない。その存在はわずかに地元に所蔵される「書上帳」の「村方ひかへ」において指摘されているのがあるが，それにしてもかって音丸山に城が存在したという地元の伝承を地誌編纂にともなう調査に際して書き上げたものにすぎず，それも結果的には全く採用されなかったのである。しかし現在のところこれ以外には拠るべき文献史料は見られず，かかる史料的制約からそれ本来の城名や代表的な城主名は明らかでなく，さらにそれが十分に機能した年代を特定することも全く不可能と言わねばならない。

しかし，前章までに報告されたように，発掘調査の結果，空濠や土塁などの遺構が検出され，「唐堀」の存在を指摘している「書上帳」の記載が裏付けられた。つまりそこに城の存在したことが確認されたわけであり，さらにかかる遺構や出土遺物などからは，音丸城が機能し

た時代を14～15世紀代前後すなわち鎌倉時代末期から南北朝時代を経て室町時代に至る時期に比定できた。応仁元年（1467）の応仁の乱を契機とするともいわれる戦国時代にはいかようであってか確認されていないが，むしろ後述のように，群雄が割拠して相互に抗争したこの動乱の時代にこそ，音丸城はその存在価値を十分に発揮したのではないだろうか。

音丸城そのものについても，六ケ岳の北方に拡がる丘陵の突端部に位置する一種の山城であるが，その規模などからみて，有事に際してはともかく，平時には無人もしくはごく少数の城番が駐在するにすぎない番所あるいは砦的性格の施設と推定される。つまり一種の端城であり，周囲の地理的環境からみて，これの東北方約7～800 *m*に位置する剣岳城がその本城ではないだろうか。音丸城の基本的属性についてこのように解するならば，それ自体は軍事戦略的に独立した存在ではないが，戦国時代の在地勢力相互間の激しい対立抗争が展開される状況の中においては，剣岳城の八尋方面に対する出城として，その西方前面を防禦する前線拠点として有効な機能を果したであろうことは推察にかたくない。またかかる音丸城であれば，文献史料的にそれ本来の城名や城主名などが明らかでないことはむしろ当然と言うべきであり，それ自体は固有の名称を有さず，また特定の城主も存在しなかったのではないだろうか。

このように，音丸城は剣岳城を本城とする端城的なものと考えられるが，それが果した具体的な役割などについてはこれ以上明らかではない。そこで，以下においては，かかる音丸城がいかなる状況の中で存在したかということについて，中世における鞍手地方の歴史展開とくに南北朝内乱の時代から戦国時代にかけての軍事情勢の推移について見てみよう。

Ⅳ

寿永2年（1183），安徳天皇を奉ずる平家一門は緒方惟栄らによって太宰府を追われ，山鹿秀遠の山鹿城に迎えられた。彼の父である粥田経遠は府官藤原政則の子孫で，鞍手・嘉麻・穂波（後2者は現在の嘉穂郡・飯塚市）の遠賀川流域を中心に1000町歩にもおよぶ広大に所領を有し，多くの家子や郎党を率いる当地方の一大勢力であった。その所領はのちに鳥羽上皇に寄進され，現在の鞍手郡宮田町本城を中心とする粥田荘として立荘されたが，その後同荘からは野面荘・楠橋荘・感多荘などの荘園が分立しており，その広大さを窺える。また秀遠が本拠として山鹿荘は遠賀川河口に芦屋津と相対する海上交通や貿易の要地でもあり，遠賀川流域に点在する諸荘園の外港としての機能を果していた。「平家物語」などには，彼が大きな軍事力を有し，有力な平家方として壇ノ浦の合戦ではおおいに活躍したことが記されている。この時，香月の畑の白木城主香月庄司秀則は秀遠に呼応し，平家滅亡後も直方市東部の頓野付近において2年にわたって源氏方に抵抗したという。

平家滅亡後，山鹿秀遠などの平家与党はきびしい追及を受け，その広大な所領を没収されて没落し，山鹿・香月氏などに率いられて平家方に与した当地方の武士の多くも大きな打撃を受け

た。これらの平家与党跡には関東から下向してきた武藤（少弐）・大友氏などに代表されるいわゆる西遷御家人が地歩を固め，次代の主役となる。また平家没官領のうち，北条政子に伝えられた粥田荘はのち高野山金剛三昧院に寄進され，若宮荘は醍醐寺三宝院領となった。山鹿荘の地頭職は北条氏に与えられ，下野国から宇都宮氏一族の麻生氏が地頭代官として下向し，やがて有力国人の１人に成長していった。

鎌倉幕府の支配体制が確立されるにつれて在地武士層の御家人化が進み，当地方では山鹿・香月・粥田・頓野氏などの名が知られるが，彼らが主として当地方の東半部から遠賀郡にかけてを本拠としていたこと以外にはその具体的な事績は明らかではない。一方，西隣の宗像郡を本拠とする宗像大宮司家は平安時代末期以来武士化し，源平内乱に際しては当地方における有力な源氏方として香月氏などに対抗し，若宮町から宮田町にかけての西半部に勢力を伸ばしていた。また宗像宮の末社である鞍手町室木の六岳神社は宗像三女神が最初に鎮座したという伝承を有し，同町古門地区はその古来の神領と称されていた。承久３年(1221)には信房法師（大宮司氏国）が社領無流木すなわち室木などの地頭職を安堵されているように，その勢力は現在の直方市を除く鞍手地方のほぼ全域に及んでいたようである。(註5) 換言すれば，かかる宗像氏は鞍手地方における最大の勢力であり，その存在は以後の歴史展開に大きな影響を与えたのである。

元弘３年（1333），京における幕府方の劣勢を知った少弐貞経や大友貞宗などは鎮西探題北条英時を博多に攻めて自刃させ，これを契機として九州は半世紀以上にも及ぶ南北朝内乱の時代に突入したが，それは，同時に，戦国時代を経て天正15年（1587）のいわゆる豊臣秀吉の九州征伐に至るまでの約２世紀半にわたる絶え間ない動乱の時代の幕明けでもあった。

「豊前古城記」によると，この年，少弐頼尚は福智山の支峯鷹取山（直方市）の山頂に鷹取城を築き，末子の式部少輔頼直を籠め置いたというが，「少弐氏系図」などには頼直の名は見えない。しかし少弐氏が当地方の武士に対してより高次の権威を有し，またのちこの城には同族の筑紫氏が在城することなどによってかかる伝承が生じたのであろう。この城は豊筑両前国境に位置し，四方を俯瞰しうる立地条件から，とくに戦国時代においては重要な戦略拠点となっている。翌建武元年には，北条氏一門の規矩高政が再挙を図って帆柱山（北九州市八幡西区）に挙兵し，麻生一族の山鹿政貞などのいわゆる得宗被官もこれに呼応したが，宗像氏など筑前の諸氏を率いた少弐頼尚によって間もなく平定され，北条氏再興の夢は消え去った。

建武３年（延元元年，1336），新田義貞らに敗れて西走してきた足利尊氏は少弐頼尚に迎えられて芦屋津に上陸し，宗像大宮司氏範の館に入り，翌日の多々良浜（福岡市東区）の戦では菊池武敏に大勝した。戦後，宗像氏範には勲功賞として楠橋荘が与えられ，宗像宮の神宮寺である鎮国寺の如意輪堂には開田四郎女子跡が寄進された。(註6) 開田一粥田が音通する点からみて開田氏は粥田荘の開発領主である粥田氏と同族関係にあり，その所領も鞍手郡内に所在したと推定され，この開田四郎女子跡もその一部と考えられる。ともあれ，これによって宗像氏は鞍手

郡内における勢力をさらに拡大したのである。

足利尊氏は，東上に際して，一族の一色範氏を博多にとどめ，九州経略に当らせた。いわゆる九州探題であるが，征西将軍宮懐良親王を奉じて菊池・阿蘇氏を中心とする宮方（南朝）に対し，範氏が率いる探題方（北朝）は当初から劣勢であり，さらに足利直冬や探題の存在に不満をもつ少弐頼尚などの佐殿方が分裂し，三者は目紛しい離合集散をくり返しながら激しい抗争を展開した。北朝方の内訌によって優位に立った宮方は，正平８年（文和２年，1353）の針摺原の戦や同14年（延文４年）の筑後川の戦などを経て，同16年（康安元年）には少弐氏の本拠でもある太宰府を占領し，征西府も進出してきた。しかし建徳元年（応安３年，1370）には今川貞世（了俊）が九州探題に任命され，文中元年（応安５年）には征西府の拠る太宰府を陥落させた。彼はその後も九州経略の戦を進め，元中８年（明徳２年，1391）には菊池氏を降して九州一円をその支配下に置くことに成功した。

ところで，当代の武士社会において庶子の自立が進むなど基本原則であった惣領制の矛盾が顕在化し，南北両朝の対立抗争とも相まって惣庶間の対立抗争が激化していたが，彼らの多くは大義名分よりも自己の利害にもとづいて戦うため，向背の一定しない者が少なくなかった。その庶子には宮方に属した者もおり，また佐殿方に与した時期もあるが，ほぼ北朝方として戦った宗像大宮司家のように，当地方の武士の多くは少弐氏の支配を強く受け，北朝方に属していたと推察される。「歴代鎮西要略」などには建武年間の雲取(直方市)城主麻生遠長や興国６年(貞和元年，1345)に鷹取城に入城したという筑紫統種などの名も見えるが，かかる軍記物には史料的信憑性そのものに問題があり，彼らが南北朝内乱をいかに戦ったかはほとんど明らかではない。しかし彼らの場合も当代の一般的傾向からは例外ではなく，所領を安堵し，恩賞を与えてくれるより高次の権威の選択に苦慮しつつ彼に自己の存亡を賭け，不安と期待に悩みながら毎日を戦ったと考えられる。また当代の主たる戦場は太宰府周辺から筑後にかけての地方であり，田川地方における合戦も知られているので全く皆無というわけではないが，太宰府地方とは三郡山地によって隔てられている当地方などにおいては，さして大規模な合戦は行なわれていないようである。

応永２年（1395），大内義弘の讒言によるともいわれるが，探題今川了俊が突然罷免され，後任には渋川満頼が任命された。以後の探題職は渋川氏によって世襲されるが，いずれも政治的力量に劣っていたため少弐・大友氏など九州在地の有力者は公然と反抗し，さらには大内氏も加って彼ら相互間の対立抗争も頻発し，北九州は再び無秩序な内乱状態を呈し始めた。

V

大友氏の内訌に端を発したといわれる応永の戦乱を契機として，中国の有力守護大名である大内氏が北九州に進出し，在地勢力を代表する少弐氏あるいは大友氏との激しい抗争の中で一進一退をくり返しながら，次第に地歩を固めた。応永6年には大内盛見が田川から当地方にかけてを攻略し，鷹取城主筑紫上総介統種など当地方の多くの城主や武将が彼に投降した。(註7) またこの年には，菊池氏が鷹取城を攻め，城主筑紫統種が大内盛見に従って規矩郡に在陣中だったこともあり，同城は火をかけられて落城したという。

その後，大内氏は応永の乱における義弘の敗死や永享3年（1431）の盛見の戦死などによって一時的には劣勢となることもあったが，事態の収拾を急ぐ幕府の政策にのって着実に勢力を拡大し，15世紀中葉の教弘の時代には少弐氏を追放して筑前や筑後をほぼ制圧し，要地には家臣を配置するとともに，原田・秋月氏など多くの国人を被官に組入れた。応仁の乱に際して大内政弘が西軍の中心として京都に在陣していた間隙をぬって，少弐教頼が東軍に与して筑前回復を図って宗氏とともに攻め入り，大友氏もこれに同調したが，間もなく大内氏に鎮圧され，教頼は戦死した。文明年間（1469～87）にも旧領回復を図る少弐氏が筑前に攻め入り，各地で大内氏と戦をくり返したが，軍事力において劣る少弐氏が強大な大内氏の支配を覆すまでには至らず，その後は対馬の宗氏の支援を得て肥前などでわずかな抵抗を続けたにすぎず，永禄2年（1559）の時尚の自殺によって事実上滅亡した。この間，粥田荘は両氏の家臣などによって所々が押領され，幕府は金剛三昧院の申請によって再三にわたって押妨を停止し，両氏に対して半済分の還補を命じているが，その実効はほとんどなかったようである。

鞍手町内の各神社の縁起など地元の伝承によると，応仁年間（1467～68）に梅野土佐は剣岳の八剣神社を山の鬼門にあたる艮（東北）に遷し，山上に居城を築き，中山など周辺の7村を領したという。文明年間（1469～87）になると剣岳城は宗像氏の下城となり，その臣野中勘解由貞時が在城したが，彼はのちに過失があって出奔し，そのため剣岳城は空城になった。また彼はその間に新延の剣神社を再興し，同所の腰山城にも在城したと伝えられている。明応年間（1492～1501）には六ケ岳の南麓の龍ケ岳城（宮田町龍徳）に大内氏の臣で豊前守護代杉氏の一族興政が在城し，粥田荘を支配していた。

一方，前にも述べた鷹取城には毛利鎮実が在城していたが，彼の名はその後天正年間（1573～92）に至るまでの16世紀代を通じての諸書に散見されるように，彼の事績には同氏数代のものが重複して表現されているようであり，その実年代は必ずしも明らかではない。「宗像軍記」によれば，永正元年（1504）に大友宗麟は鷹取城を攻め，鎮実は大友氏の降人になったというが，周知のように，宗麟の生年は享禄3年（1530）であり，この記事の信憑性には問題が残される。また「筑前要領大友家戦史」(註8)には，天文11年（1542）に筑前攻略をめざす「豊後国大

友宗麟子息左近将監義統」が1万3千騎を率いて鞍手郡に攻め入り，まず鷹取城を陥して城主鎮実を生虜となし，ついで宗像氏の前進基地である若宮地方の諸小城を陥したことが見える。しかしこれにも永禄元年（1558）生れの義統が主将として記されているなどの錯乱が多々見られ，それを直ちに史実とみなすことはできない。鷹取城主毛利鎮実の大友氏への服属の実年代は確定できないが，大友氏の筑前制圧が現実となる弘治年間(1555～58)以降のことであろう。

大内義隆の制圧以来，静謐であった北九州では，天文20年（1551）に彼が家臣の陶晴賢に襲われて自殺したことにより，またしても無秩序の状況となり，大内氏後退の跡を受けて大友宗麟の筑前進出が積極的となった。その頃，剣岳城は秋月文種に属し，跡部安芸守が城代であったが，弘治2年（1556）に文種は大友氏に討たれ，跡部安芸守も松尾左馬頭と対立して謀殺され，剣岳城は鷹取城主毛利鎮実の支配に服したという。しかし「宗像軍記」によれば，永禄4年（1561）に大友氏の部将が毛利鎮実を先導として宗像の許斐城を攻略しようとした時，剣岳城の跡部安芸守はこれに抵抗し，結局は落城したとも言うが，同書はその時の大友軍の案内者を手利鎮光とも記すなど，この間の伝承はきわめて錯綜しており，また跡部安芸守についても，天正15年の豊臣秀吉の九州征伐に際しては，剣岳城は毛利鎮実に属して跡部安芸守が在城していたが，毛利氏は秋月氏に属していたため，秀吉方についた山鹿城主麻生次郎左衛門によって攻められ，剣岳城は落城したとも伝えられ，にわかに断定することはできない。

粕屋郡立花山に拠る大友方の立花道雪に対して，大内方は宗像郡福間西郷を最前線として，深川，川津などの家臣を配していたが，彼らは大内氏の滅亡後は宗像氏に属していた。しかし立花氏の強勢に圧迫された宗像氏貞が立花道雪に妹を嫁せ，その化粧田として福間西郷を贈ったため，深川，川津らの部将は若宮地方に移住せしめられ，おおいに不満を有していた。このような時，立花城から鷹取城の毛利鎮実に対して救援送粮の部隊が派遣されることになり，龍ケ岳城に拠る大内氏の旧臣杉権頭連並はその通過を阻止しようとして失敗し，立花勢は所期の目的を達した。しかるに，その帰途，宮田町長井鶴付近において若宮郷士がこれを襲撃し，若宮町小金原にかけて戦闘が展開され，立花勢優勢のうちに日没とともに戦闘は終了した。これは小金原の合戦と称されているが，その発生した年は天正9年とも10年ともいわれて判然としない。ともあれ，これは当地方における戦国時代最大の合戦であった。

以上，当地方の戦国時代における状況についてきわめて概略的に述べたが，参考となるべき資史料の多くが伝聞性の強いものであり，個々の事象あるいはそれの実年代などについては少なからぬ問題点が存する。

鎌倉時代以来，当鞍手郡の西半部を勢力下に置いた宗像氏をはじめとして，龍ケ岳城の杉氏にも代表されるように，当地方は大内氏の支配を強く受けていた。しかしその滅亡とともに，当地方は豊前と国境を接することもあって，豊後の大友氏にとっては筑前経略の一方の進路となった。すなわち，大友氏は太宰府岩屋・宝満両城とともに立花城を筑前経略の拠点としてい

たが，前進拠点である鷹取城と立花城との中間に位置する当地方の戦略的比重はきわめて大であった。換言すれば，大友氏にとって筑前支配を確立する上で鷹取城から立花城に至る通路にあたる当地方を制圧することは不可欠の要件であったが，逆に大内氏就中宗像氏にとってそれ死命を制せられることであり，絶対に阻止すべきことであった。

このように，当地方は戦国時代の北九州の二大勢力すなわち大内・大友両氏の接点であり，そのために複雑な様相を呈した。当地方には独自の勢力は存在せず，在地の武士はいずれかに属することによってその存在を維持しなければならず，そのためにはいわゆる代理戦争をも余儀なくされていた。その種の合戦は多く伝えられているが，それらは彼らにとっては存亡を賭けた戦であっても天下の大勢に影響するようなものではなかった。（倉住靖彦）

註

註1. 所蔵文書の調査に際しては種々の便宜を受けた。とくに記して謝意を表する。

註2. 以下では単に「書上帳」と略称する。

註3. 竹田定直の自筆校正本が底本とされているが，これには巻31が「拾遺」として加えられている。

註4. 糸島郡「朱雀文書」にも文政3年の年紀をもつ「風土記附録御調ニ付志摩郡板持村書上帳」が見られる。

註5. 「宗像神社史」

註6. 「宗像社家総文書目録」に建武3年卯月8日の「開田四郎女子跡御寄進状」と見える。

註7. 前述のように，興国6年（貞和元年）に鷹取城に入城したという人物も同姓同名であり，時間的な経過からみても検討すべき余地がある。

註8. 鞍手郡教育会編「鞍手郡誌」所引。

鞍手町関係年表

西暦	年号	事項
1182	寿永元	この頃古門，神崎は宗像氏国の所領なり（宗像記追考）
1184	3	宗像氏国宗像鞍手半郡を領有，宗像郡の白山を居城とし，古門を若宮庄に編入す（宗像記追考）
1190	建久元	この頃，鞍手郡総田数一，五八四町三反，内寺領五〇町，庄領九三二町，府領二八町，国領三七〇町（三昧院文書）
1221	承久3	幕府宗像領を没収し，信房を宗像社領室木，宮田の地頭職とす，義時の下知状による（宗像文書）
1239	延応元	2．粥田庄を高野山の一心院に寄進して四十年とあり（福岡県史）
1387	元中4	4／3　鎮西探題今川了俊，室木村の中，七町分を宗像宮神領とす（鳥野神社文書）
1392	9	粥田庄は九州探題，今川了俊より半済の令を出す（三昧院文書）
1394	応永元	応永年中，新北，長谷は一村で，宗像氏信の社務領なり（長谷中萬祭帳）
1396	3	足利義持の御教書により，粥田庄の領地を安堵す（三昧院文書）
1400	7	10／26　少弐貞頼，宗像郡内宮永，留牟木，石田を宗像氏重に奉行さす（宗像神社記）
1439	永享11	植木ノ庄に於て百姓逃散す（大内家壁書）
1447	文安4	この年より杉弾正重忠，粥田ノ庄に半済分を知行す（三昧院文書）
1467	応仁元	応仁の頃，中山外七ケ村を剣岳城主梅野土佐が領し，八剣神社を山の艮にうつす（八剣神社社記）
1469	文明元	文明の頃，剣岳城は宗像の下城となる，城主は野中勘解由貞時，彼は後に過失ありて出奔す，ために城は空城となる（八剣神社社記） その頃，剣岳城々主跡部安芸守，熱田神社に神田を寄進す（熱田神社社記） 文明の頃，地頭香月七郎大夫興則，大内義興に属し，杉弾正を攻む（筑前国続風土記）文明の間，野中勘解由，新延腰山城々主たり（剣神社社記）
1475	7	大友氏の幕下，野中勘解由，木月の剣神社に神輿を寄進す（剣神社社記）
1478	10	粥田庄の半分は寺領に返りしも，杉長菊丸が半済を知行し，安富掃部助が堺郷の半分を知行す（三昧院文書）
1479	11	粥田庄の年貢米下行書上に「兵士米十貫」とあり（三昧院文書） 陶弘詮，粥田庄の守護所として，木屋瀬に住す（三昧院文書・筑紫道記）
1480	12	この頃，杉弘明が粥田庄の庄官をつとむ（筑紫道記） 粥田庄の下行日記に，八尋郷公事銭一貫三百文とあり（三昧院文書）
1483	15	閏7　粥田庄の百姓ら反銭未納のため逃散多く，山口の大内氏に愁訴して減額を許さる（三昧院文書）
1492	明応元	明応年中，竜ケ嶽城に杉十郎興政居城す（明福寺文書）

1497		6	9. 宗像興氏，六岳宮の神殿再興，「宗像郡室木村第二宮」の棟書に興氏支配にて建立とあり（六岳神社略記）
1527	大永	7	この頃，杉興政，粥田ノ庄を領す（新入剣神社縁記附録）
1530	享禄	3	享禄天文の頃，遠藤大膳，神崎城か尾に居城すと伝う（遠藤家譜）
1532	天文	元	天文の頃，剣岳城は秋月文種に属し，家臣の跡部安芸守城代となる （太宰管内志） 天文年中，龍ケ岳城主杉十郎興政，八尋十六神社に鰐口を奉納す（八尋十六神社社記） この頃，杉興長粥田ノ荘を領す（新入剣神社縁起附録）
1555	弘治	元	弘治年中，跡部安芸，松尾左馬頭と争い毒殺さる（太宰管内志）
1558	永禄	元	永禄年間，鷹取城主毛利兵部少輔鎮実，山城国愛宕の貴船宮を上木月に勧請す，一説には天正年中ともいう（貴船宮社記）
1559		2	石松加賀守秀兼，宗像大宮司氏貞の代官として，六岳神社々殿再興（六岳神社縁起）
1560		3	8／16 宗像氏貞，赤間表の戦に功労ありし，石松対馬守に軍忠状を与う（石松文書） 12／5 杉連緒，家臣尾仲佐渡守に，新入郷の金武名，下の名，八尋郷の寺武家領浮免の地，併せて四町九反余を与う（尾仲文書）
1561		4	5. 大友の家臣十河十郎，矢野隼人らが，鷹取の城主毛利鎮実を先導として，宗像の許斐城を攻略せんとする時，跡部安芸守，剣岳城にあって，これをさえぎるも，終に落城す（宗像軍記）
1563		6	8. 鷹取城主毛利兵部鎮実の臣副田若狭介辰則，この地を領せしが，永禄六年八月朔日，本殿造営す，当時神官佐野正氏なり，造営に与わるもの，福田辰則，野中修理ノ進，篠原三郎右衛門なり（木月剣神社々記・佐野文書）
1570	元亀	元	この頃，木月村は遠賀郡なり（佐野文書）
1571		2	新北熱田神社の社殿焼失，跡部安芸守神田を寄進す（熱田神社社記）
1574	天正	2	龍ケ岳城主杉興長が，新入村の剣神社に八尋郷寺家分藤之木名壱町寄進す（剣神社社記） 毛利鎮実幕下，副田若狭介，木月，底井野を領し，木月剣神社に祭田八反を寄進す（剣神社社記） 鷹取城主毛利鎮実，中山八剣神社に神興三基を奉納す（中山八剣神社社記）
1580		8	5. 大友氏，鷹取城主毛利鎮実に，底井野の猫城の吉田倫行を攻めさせ，上木月の今許斐の戦となる（猫城俚諺抄・筑前国続風土記） この合戦にて上木月の貴船社は焼失す（上木月貴船宮社記）
1582		10	石松加賀守兼秀小金原の戦にて戦死（石松家譜）
1583		11	5／22 杉統連の家臣尾仲新佐，新入郷金崎（神崎）村に秋月衆と戦う（直方市史）この時剣岳城の輩下も参戦せるものの如し
1587		15	この頃の八剣神社祭礼に，植木村，中山村，小牧村，新北村，新延村，木月村，磯光村参加する（八剣宮文書）
1588		16	4. 八尋村の検地あり，検使は柚木次郎左衛門以下四人（田代文書）
1590		18	室木の社家，占部作右衛門の妻，六岳神社々職を十六神社の祠官安永治部に譲る（六岳神社社記）

1595	文　禄　4	12／1「豊臣秀吉検地行朱印状」の鞍手郡検地高二三，七四八石五斗，山口宗永，筑前を検地（小早川文書）
1600	慶　長　5	黒田長政，筑前に入国し，母里太兵衛但馬友信を鞍手に配す
1602	7	中山円清寺を弾誉上人開基す，施主直方藩家老吉田壱岐（筑前国続風土記拾遺）
1603	8	鞍手郡を検地（黒田文書・太宰管内志）
1604	9	鞍手郡石高，四八，二八八石，村五三ケ村（福岡藩民政誌略） 一里塚を新延の六反田と新北の田頭に築く（中野文書）
1613	18	6．鞍手郡石高四七，四六四石
1623	元　和　9	長政の四男高政に東蓮寺藩（直方藩）四万石を分知す，重臣吉田（壱岐）重成に新北村，中山村を配し，中山辻屋敷に居宅せしむ（吉田家伝録・県史資料）

※　鞍手町誌から必要な部分を抜粋した。　（近沢康治）

福岡県中世山城地名表

豊　前　国

北九州市　門　司　区		
1	門司城跡	和布刈
2	金山城跡	黒川字金山辻
3	猿喰城跡	大字猿喰
4	寒竹城跡	吉志字上吉志
5	三角城跡	清滝町
6	東明寺城跡	龍門町東明寺山
7	丸山城跡	大積
8	柳城跡	大里寺内町
9	恒見城跡	恒見字上の山
北九州市　小倉北区		
10	小倉城跡	室町
11	若王子城跡	富野須賀町
12	足立城跡	黒原
13	引地山城跡	到津本町
北九州市　小倉南区		
14	大三ケ岳城跡	大字西谷字辻三
15	貫城跡	下貫字別府
16	赤松城跡	道原
17	稗畑城跡	高津屋宮山
18	堀越城跡	堀越
19	高畑山城跡	道原
20	恵里城跡	蒲生字今村
21	虹山城跡	蒲生
22	福相寺城跡	横代
23	長尾城跡	長行字能行
24	水上城跡	山本
25	徳力城跡	徳力
26	木下城跡	石原町
27	山本城跡	山本
28	塔ケ峰城跡	井手浦
29	丸城跡	若園町
30	椎山城跡	志井
31	海老野城跡	頂吉
32	小三岳城跡	合馬字三岳
33	三角城跡	田代
34	成腰城跡	蒲生
35	隠蓑城跡	隠蓑
36	徳光城跡 Ⅰ	徳吉字徳光
37	徳光城跡 Ⅱ	徳吉字徳光
北九州市		
38	大善寺城跡	
京都郡　苅田町		
39	松山城跡	大字松山
40	南原城跡	大字南原
41	稲光城跡	大字稲光
42	山口城跡	大字山口
43	生山城跡	
行橋市		
44	二塚城跡	大字二塚
45	長尾城跡	大字長尾
46	須磨園城跡	大字須磨園
47	高来城跡	大字高来
48	馬ケ嶽城跡	大字津積
49	稗田城跡	大字下稗田
50	宝山城跡	大字宝山
51	崎野城跡	大字崎野山城
52	蓑島城跡	大字蓑島字城

53	元永城跡	大字元永
54	沓尾城跡	大字沓尾字兵庫
55	稲童城跡	大字稲童
56	覗山城跡	大字高瀬字覗
57	天生田城跡	大字天生田
58	矢留城跡	大字矢留
59	平島城跡	大字平島
60	福富城跡	福富
	京都郡　勝山町	
61	浦河内城跡	大字浦河内
62	矢山城跡	大字矢山
63	障子岳城跡	大字上野
64	十鞍山城跡	図師
65	長川城跡	長川
66	尾倉山城跡	岩熊字尾倉山
67	勝山城跡	本庄
	京都郡　豊津町	
68	節丸城跡	大字節丸
69	惣社城跡	惣社
70	黒岩城跡	光富
71	辻野屋敷城跡	
	京都郡　犀川町	
72	大村城跡	大字大村
73	因州城跡	大字大村
74	山鹿城跡	大字山鹿
75	大熊城跡	大字大熊
76	崎山城跡	大字崎山
77	柳瀬城跡	大字柳瀬
78	上高屋城跡	大字上高屋城
79	横瀬城跡	大字横瀬
80	下伊良原城跡	大字下伊良原
81	須江城跡	大字末江
82	のりき山城跡	大字木井馬場
83	神楽城跡	大字木井馬場
84	大谷城跡	
85	戸垣城跡	
86	不動ケ岳城跡	大村
	京都郡	
87	大谷城跡	
88	西郷城跡	
89	釜倉城跡	
	田川郡　香春町	
90	香春嶽城跡	大字採銅所
91	柿下城跡	区字柿下
92	手切城跡	大字採銅所
93	勝司岳城跡	大字鏡山
94	鬼ケ城跡	大字採銅所
	田川郡　方城町	
95	伊方城跡	大字伊方
96	新田城跡	大字弁城
97	弥次郎畑城跡	大字弁城
	田川郡　赤池町	
98	上野城跡	大字上野
99	観音寺城跡	大字上野
100	城道寺城跡	大字上野
101	諏訪山城跡	大字上野
102	赤池城跡	赤池
	田川郡　金田町	
103	南木城跡	大字南木
104	神崎城跡	大字神崎
105	金田城跡	大字金田
	田川郡　糸田町	
106	糸田城跡	大字糸田
	田川市	

107	伊加利城跡	大字伊加利
108	糸城跡	大字上糸
109	猪膝城跡	大字猪膝
110	金国城跡	大字金国
111	上伊田城跡	大字伊田
	田川郡　赤　村	
112	赤城跡	大字下赤
113	大内田城跡	大字大内田
114	戸城山城跡	大字山浦
	田川郡　大任町	
115	今任城跡	大字上今任
116	建徳寺城跡	大字上今任
117	桑原城跡	大字桑原
118	成光城跡	大字成光
119	蛇面城跡	下今任
120	明神山城跡	下今任
121	丸岡城跡	安永
122	若木城跡	秋永
123	白土城跡	大行事
124	福田城跡	
	田川郡　川崎町	
125	木城跡	大字木城
129	安宅城跡	大字安宅
127	田原城跡	大字田原
128	川崎城跡	大字東川崎
129	立遠城跡	上真崎
130	椎木谷城跡	池尻
	田川郡　添田町	
131	津野城跡	大字上津野
132	黒岩城跡	津野
133	真木城跡	大字真木
134	野田城跡	大字野田
135	岩石城跡	大字桝田
136	大豆塚城跡	大字桝田
137	殿倉嶽城跡	大字下落合
138	下落合城跡	大字下落合
139	上落合城跡	落合
140	彦山城跡	大字彦山
141	中元寺城跡	大字上中元寺
142	小内田城跡	内田字内田
143	城の平城跡	野田
144	添田城跡	添田
145	弓張城跡	添田
146	平岡城跡	
	田川郡	
147	金岡城跡	金岡
	築上郡　椎田町	
148	宇留津城跡	大字宇留津
149	岩丸城跡	大字岩丸
150	湊城跡	大字湊
151	畑城跡	大字畑
152	広幡城跡	大字水田
153	野仲城跡	大字西八田
154	塩田城跡	八田
155	有安城跡	有安
156	真如寺城跡(Ⅰ)	真如寺
157	真如寺城跡(Ⅱ)	真如寺
158	高塚城跡	高塚
159	極楽寺城跡	極楽寺
	築上郡　築城町	
160	萱切城跡	大字寒田
161	大平城跡	寒田
162	伝法寺城跡	大字伝法寺
163	堂山城跡	大字伝法寺

164	若山城跡	大字本庄
165	勝山城跡	大字本庄
166	小河内城跡	大字上本庄
167	築城城跡	大字築城
168	楠城跡	別府
169	別府城跡	大字上別府
170	釜倉城跡	大字上香楽
171	小山田城跡	大字小山田
172	高畑城跡	大字松丸
173	元山城跡	赤幡
174	赤幡城跡	大字赤幡
豊前市		
175	鳥越城跡	中村
176	川内城跡	川内
177	馬場城跡	大字馬場字東山
178	高田城跡	大字広瀬字高田
179	山田城跡	大字川内字山田城
180	八屋城跡（Ⅰ）	大字川内字前川
181	大村城跡	大字大村字権屋坂東
182	高城跡	大字中川底字高城
183	海老名城跡	大字下川底城手前
184	求菩提山城跡	大字求菩提山
185	火の浦城跡	大字篠瀬字火の浦
186	岩屋城跡	岩屋
187	久路土城跡	大字久路土
188	千束旭城跡	大字千束字千束ノ田
189	赤熊城跡	赤熊
190	大河内城跡	大字大河内
191	下川内城跡	大字下川内
192	山内城跡	山内
193	八屋城跡（Ⅱ）	大字八屋
194	角田城跡	
築上郡　大平村		
195	東上城跡	大字東上
196	叶松城跡	大字東下
197	追揚城跡	大字東下
198	松崎城跡	大字東下
199	内蔵寺山城跡	大字東下
200	原井城跡	大字原井
201	光明寺城跡	大字西友枝
202	雁股城跡	大字西友枝
203	松尾山城跡	大字西友枝
204	代金城跡	大字百留
205	百留城跡	大字百留
206	下唐原城跡	大字下唐原
207	壇の城跡	唐原
築上郡　吉富町		
208	広津城跡	広津
209	幸子城跡	幸子
築上郡　新吉富村		
210	安曇城跡	大字安曇
211	牛王城跡	矢方
212	日熊城跡	大字大ノ瀬字日熊
213	緒方城跡	大字緒方
214	田島城跡	大字成恒字今村
215	尻高城跡	尻高
216	吉岡城跡	吉岡字坪の内
築上郡		
217	田島崎城跡	

筑　前　国

北九州市　戸畑区		
1	若松中島城跡	中島
2	天賀城跡	天頼寺大谷公園
北九州市　若松区		
3	花房山城跡	大字畠田字大谷
4	高塔山城跡	大字修多羅
5	浜田城跡	修多羅
北九州市　八幡西区		
6	永犬丸城跡	永犬丸
7	園田浦城跡	永犬丸字岩渕
8	帆柱山城跡	大字市ノ瀬一番
9	比津城跡	上津役
10	竹の尾城跡	上津役
11	市ノ瀬城跡	上津役市ノ瀬
12	本城城跡	本城蛭ケ谷
13	畑山城跡	畑
14	花尾城跡	大字鳴水字花ノ尾
15	黒崎城跡	黒崎田町
16	浅川城跡	浅川
北九州市　八幡東区		
17	大蔵城跡	大蔵
18	篠谷城跡	大蔵
遠賀郡　水巻町		
19	古賀城跡	古賀
遠賀郡　芦屋町		
20	山鹿城跡	山鹿字船ケ浦
遠賀郡　遠賀町		
21	五郎城跡	島津
遠賀郡　岡垣町		
22	岡城跡	吉木字知
23	隆守城跡	吉木
24	龍王山城跡	吉木
25	城山城跡	大字上畑
26	雨乞城跡	大字手野
27	海蔵寺城跡	海蔵寺
中間市		
28	猫城跡	上底井野字道上
直方市		
29	雲取山城跡	上頓野
30	感田城跡	感田字浦谷
31	鷹取山城跡	内ケ磯
32	仙城城跡	下境
鞍手郡　鞍手町		
33	音丸城跡	新北
34	新町城跡	新延字乙ケ谷
35	剣岳城跡	大字中山
36	古野城跡	（古月小学校）
鞍手郡　宮田町		
37	笠木山城跡	宮田
38	宮田城跡	宮田
39	本城山城跡	大字龍徳字本城山
40	祇園嶽城跡	竜徳
41	稲築城跡	竜徳
42	龍ガ岳城跡	竜徳
43	上有木城跡	上有木字井堀
44	下有木城跡	下有木
45	坂元城跡	大字上有木字元小字城崎
46	古野城跡	古野
47	長井鶴城跡	長井鶴
48	塔ノ峯城跡	龍徳
49	高取城跡	鶴田
50	四郎丸城跡	四郎丸

鞍手郡　小竹町		
51	山崎村城跡	新崎字城尾
52	権現山城跡	御徳字吉野
53	勝野城跡	勝野
鞍手郡　若宮町		
54	山下城跡	山口
55	山口茶臼城跡	山口字里小原
56	片山城跡	山口
57	黒鳥城跡	山口
58	宮山城跡	山口
59	岡田城跡	山口
60	沼口都市原城跡	沼口
61	沼口堀谷城跡	沼口
62	草場城跡	乙野字草場
63	篠城跡	乙野
64	宮永城跡	宮永
65	金丸城跡	金丸
66	清水城跡	大字清水
67	熊ケ城跡	大字犬鳴山頂
68	明専寺城跡	大字野中明専寺
69	鬢鏡山城跡	大金生字鬢鏡山
70	六郎丸城跡	六郎丸
71	竹原竹垣城跡	竹原
72	友池城跡	大字原田字友池
73	稲光城跡	稲光
74	天の坊城跡	天の坊
75	黒丸城跡	黒丸
76	尾園本城跡	蓮園
77	金生城跡	金生
78	吉川下城跡	下字乙藤
79	熊峯城跡	脇田
80	脇田安河内城跡	芳賀
81	山下中尾城跡	山下村
82	大谷高丸城跡	
83	寺山城跡	
84	八木山城跡	八木山
鞍手郡		
85	吉野城跡	
86	畑黒巣城跡	
飯塚市		
87	小呉竹城跡	幸袋町目尾
88	大日寺城跡	大日寺
89	木の實山城跡	幸袋町
90	白旗山城跡	二瀬町白旗山
91	伊川城跡	二瀬町伊川
92	萬松山鯰田城跡	鯰田
93	葛山（カツシヤマ）城跡	庄司町
94	立岩城跡	立岩
95	潤野城跡	
96	川津城跡	
嘉穂郡　頴田町		
97	萱城跡	鹿手馬
嘉穂郡　穂波町		
98	城山城跡	久保白
嘉穂郡　桂川町		
99	茶臼山城跡	寿命
100	城尾城跡	土師
嘉穂郡　庄内町		
101	赤坂城跡	赤坂
102	城腰城跡	有安
103	元吉城跡	元吉
嘉穂郡　筑穂町		
104	内野城跡	内野
105	高石山城跡	内野

106	向山城跡	馬敷
107	米ノ山城跡	山口竹ノ尾
108	城ガ尾城跡	城ガ尾
109	藤ノ木城跡	藤ノ木
110	小佐城跡	北古賀
111	高の山城跡	高田
112	宮山城跡	津原
113	懸尾城跡	内住
114	丸尾城跡	大分
115	一の谷城跡	平塚
	嘉穂郡　碓井町	
116	小岳城跡	上臼井
117	日野山城跡	上臼井
118	長谷山城跡	平山
	嘉穂郡　嘉穂町	
119	茶臼山城跡	阿恵
120	扇山城跡	阿恵
121	花尾城跡	桑野
122	片邊城跡	椎木
123	鬼杉城跡	椎木
124	益富城跡	大隈
125	馬見城跡	馬見
126	塘迫城跡	小野谷
127	遠見ケ城跡	小野谷
	嘉穂郡　稲築町	
128	山野城跡	山野
	山田市	
129	たい王城跡	上山田
130	筒見岸殿城跡	下山田
131	岸殿城跡	下山田
	宗像郡　玄海町	
132	片脇城跡	田島字本村
133	吉田城跡	田島
134	勝島城跡	神湊
135	草崎城跡	大字牟田尻
136	大障子城跡	多礼
137	地島城跡	地島
	宗像郡　宗像町	
138	徳重城跡	徳重
139	田久城跡	田久
140	茶臼山城跡	三郎丸
141	今井城跡	三郎丸
142	須恵城跡	須恵
143	平等城跡	平等寺
144	白山城跡	山田
145	許斐城跡	吉原
146	赤間山城跡	赤間
147	朝城跡	朝町
148	石丸城跡	石丸
149	葛ケ嶽城跡	
	宗像郡　大島村	
150	大島城跡	大島
	宗像郡　津屋崎町	
151	宮地嶽城跡	宮司
152	勝浦嶽城跡	勝浦字勝浦嶽
	宗像郡　福間町	
153	鵜ケ嶽城跡	大字本木字祥雲寺
154	宝林城跡	大字本木字万歳丸
155	蠧蛞羽子（クラハゴ）城跡	本木字大浦
156	城の浦城跡	本木字城の浦
157	飯盛山城跡	大字内殿字且ノ原
158	高宮城跡	大字畦町字高宮
159	冠山城跡	大字冠字冠
160	侍部殿谷（ジブトンダニ）城跡	大字八並字許斐山

161	上西郷城跡	上西郷
162	香雫城跡	
163	亀山城跡	四角字切寄
	粕屋郡　古賀町	
164	薦野臼嶽城跡	薦野
165	青柳町新城跡	青柳町小竹
166	四方城跡	青柳町
	粕屋郡　新宮町	
167	立花山城跡	立花
168	下山田城跡	
169	上山田城跡	
	粕屋郡　篠栗町	
170	飯盛山城跡	金出
	粕屋郡　粕屋町	
171	丸山城跡	大隈
	粕屋郡　須恵町	
172	飛尾城跡	佐谷
173	高鳥居城跡	大字下須恵字岳城山
	粕屋郡　宇美町	
174	頭巾山城跡	大字宇美
	粕屋郡	
175	草葉城跡	
	福岡市　東区	
176	名島城跡	名島
177	御飯の山城	香椎
	福岡市　博多区	
178	三野城跡	美野島
179	稲居塚城跡	月隈
	福岡市　中央区	
180	福岡城跡	
	福岡市　西区	
181	姪浜城跡	姪浜字愛宕山
182	九州探題城跡	姪浜町
183	鷺城跡	今津
184	柑子嶽城跡	今津町柑子岳
185	浦の城跡	能古町北浦
186	都地城跡	都地
187	飯盛城跡	飯盛
188	茶臼城跡	早良町重留
189	安楽平城跡	早良町荒平
190	本城跡	早良町内野
191	曲渕城跡	早良町曲渕
192	三瀬城跡	早良町三瀬峠
193	星山城跡	今宿青木
194	水崎山城跡	元岡
195	草場城跡	草場
196	臼杵城跡	今津
	福岡市　南区	
197	古野城跡	向野東町矢台
	糸島郡　志摩町	
198	馬場城跡	馬場
199	加也山城跡	也山
200	岩松城跡	浦
201	浦城跡	浦
202	新城山城跡	芥屋新町
203	西田城跡	井田原
204	親山城跡	親山
	糸島郡　前原町	
205	篠原城跡	篠原
206	小倉城跡	篠原
207	高祖城跡	高祖
208	加布里城跡	加布里
209	有田城跡	有田
210	泊城跡	泊

211	旗振山城跡	飯原
212	城山城跡	板持
213	油比城跡	油比
214	舞岳城跡	前原
	糸島郡　二丈町	
215	姫島城跡	姫島
216	寶珠岳城跡	長石
217	深江岳城跡	深江二丈岳
218	吉井岳城跡	福吉
219	波呂城跡	波呂
	春日市	
220	天満城跡	下白水
	大野城市	
221	不動城跡	牛頸
222	唐山城跡 Ⅰ	乙金
223	唐山城跡 Ⅱ	乙金
	筑紫郡　那珂川町	
224	龍神山城跡	安徳字城山田
225	一嶽城跡	城
226	城ノ腰城跡	上梶原
227	老林城跡	別所
228	鷲ケ嶽城跡	南面里
229	猫嶺城跡	不入道
230	虎ケ岳城跡	綱取村
	筑紫郡　太宰府町	
231	竈門山城跡	太宰府
232	内山太宰少貳城跡	太宰府
233	宝満山城跡	宝満山
234	岩屋城跡	岩屋山
235	高尾山城跡	高雄山
236	浦ノ城跡	太宰府
	筑紫野市	
237	米かみの城跡	二日市
238	天判山城跡	天拝山
239	阿志木城跡	阿志木
240	柴田城跡	天山
241	博多見城跡	城ガ原
242	和久堂城跡	杉塚山の谷
243	龍城跡	杉塚山の谷
244	笹尾城跡	大石
245	升形城跡	大石
246	飯盛城跡	天拝山
	朝倉郡　夜須町	
247	砥上城跡	砥上
248	作手城跡	
	朝倉郡　三輪町	
249	弥長城跡	弥永
250	小鷹城跡	弥永
251	茄子ケ城跡	
252	阿弥陀峰城跡	依田
253	栗林城跡	栗田
	甘木市	
254	荒平城跡	秋月
255	上秋月城跡	上秋月
256	杉本古城跡	上秋月
257	坂田城跡	上秋月
258	殿神楽（トノガラク）城跡	下秋月（古賀ノ谷）
259	福嶽城跡	下秋月
260	道場山城跡	下秋月
261	秋月城跡	下秋月
262	茄町城跡	屋形原
263	塘山城跡	佐田
264	村上城跡	黒松
265	休松城跡	立石町柿原

266	岩切山城跡	三奈木町
267	茶臼山城跡	三奈木町荷原
268	小田城跡	福町小田
269	鼓ガ岳城跡	下淵
270	片山城跡	持丸
271	千手城跡	千手
272	古所山城跡	江川
	朝倉郡　杷木町	
273	鵜木城跡	東林田
274	長尾城跡	東林田
275	志波城跡	志波
276	本陣山跡	志波
277	高山城跡	志波
278	麻氏良城跡	志波
279	鳥山城跡	志波
280	三明城跡	池田
281	米山城跡	米山
282	前隈山城跡	志波
283	針目城跡	松末
284	真竹山城跡	松末
	朝倉郡　宝珠山村	
285	庄林城跡	福井
286	蔦岳城跡	福井
287	鳥嶽城跡	
	朝倉郡　小石原村	
288	高鼻城跡	
289	松尾城跡	

筑　後　国

	小郡市	
1	大板井城跡	大板井
2	乙隈城跡	乙隈
3	山隈城跡	花立
4	吹上城跡	吹上
5	西鰺坂城跡	今朝丸
	三井郡　北野町	
6	赤司城跡	赤司
	三井郡　大刀洗町	
7	上高橋城跡	
8	下高橋城跡	下高橋
9	本郷城跡	本郷
	久留米市	
10	大隈城跡	梅満町
11	海津城跡	安武町
12	久留米城跡	篠山町
13	明星岳城跡	高良内町
14	別所城跡	御井町
15	高瀬氏城跡	御井町
16	吉見嶽城跡	御井町
17	住厭城跡	御井町
18	磐井城跡	御井町
19	舞鶴城跡	山川町
20	古宝殿城跡	山川町
21	長増山城跡	山川町
22	東光寺城跡	山川町
23	柳坂城跡	山本町
24	耳納城跡	山本町耳納
25	発心嶽城跡	草野町
26	竹之城跡	草野町
27	古賀城跡	宮ノ陣町
	浮羽郡　田主丸町	

28	隈城跡	隈
29	内山城跡	益生田
30	高丸城跡	益永
31	益永平家城跡	益永
32	小丸城跡	益永
33	諏訪平家城跡	諏訪
34	山中城跡	石垣
35	新田城跡	石垣
36	城氏城跡	石垣
37	星野城跡	石垣
38	鷹取城跡	石垣字鷹取
39	石垣城跡	石垣字耳納
40	観音寺城跡	石垣字山王西筋
41	高野城跡	益田字鏡懸
42	西カツラ尾城跡	益田字西葛尾
43	姥ケ城跡	地徳字善院
44	権現嶽城跡	森部字耳納
45	鳥飼城跡	鳥飼
46	松門寺平家城跡	松門寺
47	上笹尾城跡	竹野字三明寺
48	中笹尾城跡	竹野字笹尾
49	下笹尾城跡	竹野字三明
50	富本城跡	竹野字富木堂所
	浮羽郡　吉井町	
51	冠平家城跡	鷹取
52	福丸城跡	福益
53	谷山城跡	福益
54	村山上城跡	福益
55	妙見城跡	富永
56	妙見上の城跡	富永
57	妙見中の城跡	富永
58	妙見下の城跡	富永
59	清水城跡	富永
60	西城跡	富永
	浮羽郡　浮羽町	
61	妹川万貫平家城跡	妹川
62	妹川万貫城跡	妹川
63	長瀬城跡	三春
64	原口城跡	三春
65	松尾城跡	田籠
66	井ノ上西城	小坂
67	井上城跡	小坂
68	立石城跡	流川
69	安山城跡	流川
70	小塩城跡	小塩
71	高井岳城跡	小塩
72	東山城跡	小塩
73	長岩城跡	新川
74	隈上城跡	隈ノ上
75	大石城跡	大石
76	峯山城跡	
	八女郡　広川町	
77	川瀬城跡	川瀬
78	知徳城跡	知徳
79	長延城跡 (1)	
80	長延城跡 (2)	
81	鬼口城跡	
82	甘木河内守城跡	
	八女郡　上陽町	
83	轟城跡	轟
	八女市	
84	鷹尾城跡	山内
85	東山城跡	山内
86	犬尾城跡	山内

87	山内城跡	山内
88	柳島城跡	柳島
89	茶臼山城跡	長野(川崎庄山内村)
90	酒井田城跡	酒井田
91	福島城跡	
	八女郡　立花町	
92	白木城跡	白木
93	谷川城跡	谷川
94	兼松城跡	兼松
95	山崎城跡	山崎
96	鞍掛城跡	鞍懸
97	山下国見岳城跡	山下
98	山下城跡	山下
99	熊河城跡	上辺春
100	高朶谷蓮城跡	上辺春
	八女郡　黒木町	
101	地下名城跡	鹿子尾
102	白牧大岩屋名城跡	鹿子尾
103	筑足城跡	大淵
104	高屋城跡	北大淵
105	熊野堂城跡	北大渕
106	高牟禮城跡	椿原
107	鷲岳城跡	四条野
108	猫尾城跡	木屋
109	立華城跡	木屋
	八女郡　星野村	
110	白石城跡	十籠
111	高岩城跡	本星野
112	高島城跡	
113	内城城跡	
	八女郡　矢部村	
114	アイノツル城跡	鬼塚
115	高屋城跡	古巣塚
116	栗原城跡	栗原城（矢部村）
	三潴郡　三潴町	
117	生津城跡	生津
118	西牟田城跡	西牟田
119	犬塚城跡	王満字原巳
120	田川城跡	田川字北畑南切
	三潴郡　城島町	
121	下田城跡	下田
122	城島城跡	本丸
123	江上城跡 (1)	江上
124	江上城跡 (2)	江上
	三潴郡　大木町	
125	城の内城	横溝
	三　潴　郡	
126	溝口城跡	
127	西田口城跡	
	大　川　市	
128	津村城跡	津字城跡
129	下林城跡	下林
130	木室城跡	本木室城上
131	酒見城跡	酒見
	柳　川　市	
132	鷹取城跡	上宮永町
133	蒲池城跡	西蒲池
134	柳川城跡	坂本町
	筑　後　市	
135	吉田大膳城跡	馬間田
136	馬間田城跡	馬間田
137	下妻城跡	下妻
138	中牟田城跡	中牟田
	山門郡　瀬高町	

139	白鳥城跡	白鳥
140	江崎城跡	垂見
141	松延城跡	松田
142	大木城跡	大木
143	堀切城跡	堀切
144	浜田城跡	浜田
145	宮薗城跡	大広園
146	本郷城跡	本郷
147	小田城跡	小田
148	瀬高圧城跡	
149	吉岡城跡	
	山門郡　大和町	
150	津留城跡	六合
151	鷹尾城跡	鷹尾
152	塩塚城跡	塩塚
	山門郡　三橋町	
153	今古賀城跡	今古賀
154	垂見城跡	垂見
155	久末城跡	久末
	山門郡　山川町	
156	萱津城跡	竹飯
157	北関城跡	北の関
	三池郡　高田町	
158	江浦城跡	江ノ浦
159	飛塚城跡	田尻
160	今福城跡	今福
161	竹井城跡	竹飯
162	飯江城跡	飯江
163	今山城跡	
	大牟田市	
164	甘木城跡	甘木
165	茶臼城跡	倉永
166	内山城跡	内山
167	大間城跡	大間
168	三池山城跡	三池

（1978年1月30日現在）

※今回リストアップしたのは

豊前国	217ケ所
筑前国	289 〃
筑後国	168 〃
福岡県	664ケ所

この数は文献からの引き抜きであり，詳細に検討すれば，増減がある。一応の目安となれば幸いである。この報告書の別冊として「福岡県中世山城」という報告書を作成していたが，今回は見送り，後日に期する　（副島邦弘・近沢康治）

文　献　一　覧　表

∘伊東尾四郎編「宗像郡誌」上巻名著出版復刻本（1973）
∘鞍手郡教育委員会編「鞍手郡誌」上巻名著出版復刻本（1972）
∘千住武次郎編「九州治乱記」青潮社復刻本(1973)
　矢野一貞「筑後国史」中巻　名著出版復刻本（1972）
∘三井郡史蹟調査委員編「懐良親王と三井郡」（1923）
∘福岡県教育委員会編「史跡名勝天然記念物調査報告書」第六輯（1931）
∘福岡県教育委員会編「史跡名勝天然記念物調査報告書」第四輯（1929）
∘和田宗八著「面白い種々な見方の福岡県史史蹟名勝口碑伝説所在地」（1936）
∘岩石城史編集委員会編「岩石城」（1977）
∘貝原篤信著「筑前国続風土記」福岡県史資料第四輯（1943）
∘定村責二著「地名から探る豊前国遺跡」（1976）
∘藤川誠行編「豊前大鑑」（1936）
∘千賀四郎編「探訪日本の城」巻10西海道　小学館（1977）
∘渡辺重春・渡辺重兄「豊前志」大日本地誌大系43雄山閣（1971）
∘広崎篤夫「北九州の城」（1969）
∘上野無一「征西将軍宮千光寺ご陵墓の研究」（1929）
∘鞍手町誌編集委員会編「鞍手町誌」上巻（1974）
∘伊藤常足「太宰管内志」復刻（1971）
∘久留米市立図書館蔵「郡中寺社古城之書付」寛延二年（1782）
∘古賀寿蔵「猫城由来記」明治34年写本
∘筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会刊「久留米領古城之書付」（1971）
∘上野精志編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ」（1977）
∘池辺元明編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ」（1977）
∘副島邦弘編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XV」（1977）
∘柳田康雄編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告1」（1976）
∘小倉市役所編「小倉市誌」（1921）
∘加藤一純・鷹取周編「筑前国続風土記附録」（1977）
∘築城町史跡調査委員会編「築城町の史跡と伝説」第一集「宇都宮史」（1972）
∘行橋市文化財調査委員会編「行橋市の文化財」第2集（1976）
∘香春郷土史会編「郷土かわら」第2集（1974）
∘田川市史編纂委員会編「田川市史」上巻（1974）
∘嘉穂郡役所編「嘉穂郡志」名著出版復刻本（1972）
∘水巻町郷土史編集委員会編「水巻町誌」（1962）
∘福間町教育委員会・福間郷土史研究会編「福間町誌」明治編（1972）
∘伊東尾四郎編「宗像郡誌」名著出版復刻本（1973）
∘直方市史編さん委員会編「直方市史」上巻（1971）
∘大任町誌編纂委員会編「大任町誌」（1970）
∘三輪町教育委員会編「三輪町史」（1970）
∘粕屋郡役所編「粕屋郡誌」名著出版復刻本（1972）
∘三池郡教育委員会編「三池郡誌」名著出版復刻本（1973）

∘三潴郡役所編「三潴郡誌」名著出版復刻本（1973）
∘久留米市教育委員会編　久留米市文化財調査報告書第9集「茶臼山・東光寺遺跡」（1974）
∘大野町教育委員会編「大野町の文化財」第2集（1971）
∘久留米市教育委員会編「郷土の文化財」（1967）
∘北九州市青年郷土史研究会編「園田浦城址発掘調査報告書」（1967）
∘津屋崎町教育委員会編「つやざき」（1973）
∘福岡県教育委員会編「福岡県の史跡」（1977）
∘井上農夫「下広川郷土史」（1956）
∘福沢暁「三奈木の始元と明治大正時代」（1976）
∘大野泰治他編「夜須の歴史」（1968）
∘三浦末雄「物語秋月史」（1966）
∘古賀益城「朝倉風土記」（1963）
∘門司市役所編「門司市史」名著出版復刻本(1974)
∘企救郡役所編「企救郡誌」（1972）復刻本
∘京都郡役所編「京都郡誌」（1972）復刻本
∘遠賀郡役所編「遠賀郡誌」（1972）復刻本
∘添田町教育委員会編「岩石城」(1977)
∘八幡市役所編「八幡市史」名著出版復刻本(1974)
∘築上郡役所編「築上郡誌」
∘「筑前国続風土記拾遺」福岡県史資料図輯(1943)
∘宇美町誌編纂委員会編「宇美町誌」（1975）
∘志摩町史編纂委員会編「志摩町誌」（1972）
∘吉井町誌編纂委員会編「吉井町誌」（1977）
∘宇枳波
∘直方市役所編「直方市制記念誌」（1970）
∘北筑雑藁
∘筑後地鑑
∘筑後誌略
∘南筑明覧
∘筑後封植録
∘宗像軍記
∘稿本八女郡誌
∘瀬高町編纂委員会編「瀬高町誌」
∘石原為平「石原家記」　名著出版（1973）
∘家勤記得集
∘栗原和彦編「浦城跡」福岡県文化財調査報告　45（1970）

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXⅢ—

昭和53年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷　㈲　松古堂印刷

福岡市西区大字周船寺407